

2012 - 2016 年 科学研究費補助金
「新学術領域研究（研究領域提案型）」

現代文明の 基層としての 古代西アジア文明

—文明の衝突論を克服するために—



newsletter

Vol.6
September
2015

科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」
『現代文明の基層としての古代西アジア文明－文明の衝突論を克服するために－』

2012-2016 Grant-in-Aid for Scientific Research in Innovative Areas
the Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology in Japan

**“Ancient West Asian civilization as the foundation of all modern civilizations:
A counter to the ‘Clash of Civilizations’ theory”**

Newsletter vol.6 September 2015

CONTENTS

公募研究

- プロテオミクス技術による古代タンパク質分析 1
中世イスラーム世界における「古代」の継承と創造 3

調査報告

- 2014年イラン調査報告 7

研究集会報告

- 古代マヤ文明の広場－メキシコ合衆国 エル・パルマル遺跡から－ 15

- イラク・クルディスタン自治区とスレイマニア博物館 17

- シンポジウム・研究会開催予定 / 活動履歴 22

公募研究

プロテオミクス技術による

古代タンパク質分析



河原一樹

Kazuki Kawahara

大阪大学大学院薬学研究科・特任助教

図1 エレクトロスプレーイオン化 (ESI) 質量分析装置

研究概要

数千年もしくは数万年の時を経てタンパク質などの有機物が腐敗せずに残存することはありうるのだろうか。この疑問に対する驚くべき研究成果が2009年にアメリカの研究者らによってScience誌に報告された(Schweitzer et al. 2009)。その研究成果は、およそ八千万年前の恐竜の化石中にコラーゲンと呼ばれる動物の骨や皮膚に豊富に存在するタンパク質が今もなお保存されていることを示す衝撃的な内容を含むものである。一般的に、タンパク質は経年劣化や微生物により容易に分解されることが想定されるため、考古遺物の研究対象とはなり難いと思われてきた。しかし、この研究成果はその常識を覆し、古代DNAと並ぶ重要な研究対象としてのタンパク質を意義付けた点で画期的な研究成果である。特に、タンパク質は、生命現象の根幹を担う物質であるだけでなく、骨などの考古遺物から、絹糸や毛皮などを利用した衣類、そして土器に付着する食物残渣や、壁

画や絵画などの美術工芸品に至る多様な文化財に残存する稀有な素材である。従って、それらの詳しい分析が可能となれば生命科学分野だけでなく文化財科学分野においてもその応用価値は大きいといえる。本研究課題では、最近注目されはじめた古代のタンパク質に焦点をあて、様々な年代、地域に渡る文化財に潜む古代タンパク質の分析を行うことで、当該文化財の材質や製法の一部を解明し、保存修復作業に役立てるだけでなく、さらには世界的な視点での交流史や動物利用の実態を把握することを目的としている。

質量分析法によるタンパク質の分析

本研究では、古代タンパク質の分析手法として生体内で発現するタンパク質の機能を網羅的に解析する学問分野—プロテオミクス—において微量タンパク質の同定を可能とする基盤技術である質量分析法に注目し、特にマトリックス支援レーザー脱離/イオン化 (MALDI) 質量分析法およびエレクトロスプレーイオン化 (ESI) 質量分析法を用いて分析を行う(図1)。

いずれも2002年のノーベル賞の対象になった技術であり、主にタンパク質などの生体分子をイオン化し、高電圧をかけた真空中の飛行時間を計測することで質量を測定する質量分析技術にとって欠かせない手法となっている。MALDI質量分析法に関しては日本の田中耕一博士が開発した技術として話題になったことも記憶に新しいのではなかろうか。図2には、奈良女子大

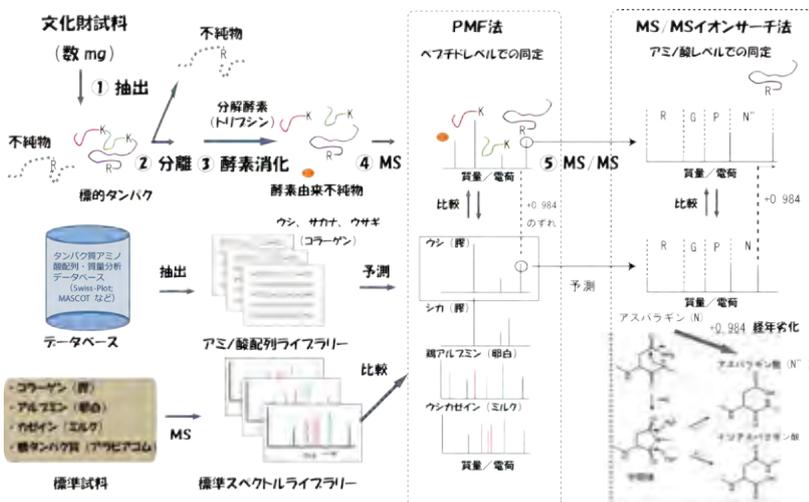


図2 質量分析を用いた古代タンパク質分析の概略図



図3 質量分析に使用したバーミヤーン・東大仏の極微量片(約440 μg)

学の中沢隆教授を中心とする研究チームと共同で提案した古代タンパク質分析の概略図を示す。

まず、対象となる文化財から試料を極微量採取する(実際には、発掘作業や資料の運搬・整理作業の際に不可避に生じる極わずかの損傷や落下片なども想定している)。この際の試料の必要量は文化財の状態にもよるが、標準試料を用いた実験から数百マイクログラム程度あれば検出できることを確認している。その後、重炭酸アンモニウムなどの緩衝液でタンパク質を抽出後(行程①)、不純物の混入が酷い場合には液体クロマトグラフィーなどのような手法を用いて分離し(行程②)、特定のアミノ酸で分解する酵素でペプチド断片にした後(行程③)、質量(MS)スペクトルを得る(行程④)。得られるMSスペクトルを既存のアミノ酸配列データベースを利用して予測されたMSスペクトル、もしくは標準試料から得られたMSスペクトルと比較し、含まれるタンパク質の推定を行う(ペプチドマスフィンガープリント(PMF)法と呼ぶ)。この際、分離しきれていない他のタンパク質由来のピークが混在している可能性もあるので、各断片のピークに対応するペプチドイオンを、さらに装置内でヘリウムガスを衝突させることによって断片化し(行程⑤)、得られる分解物の質量スペクトルからアミノ酸配列情報を得る(これをMS/MSイオンサーチ法と呼ぶ)。この方法を用いることにより、単純にタンパク質を同定するのみだけではなくDNA解析と同様に動物種の特定を行うことも可能である。また、古い文化財試料中では経年劣化により様々な修飾・分解が発見できる可能性もある。図では経年的に生じるアスパラギンと

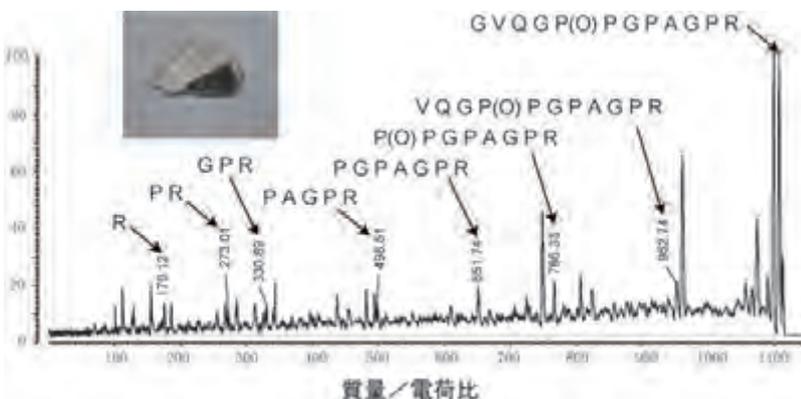


図4 マスタバ・イドウトの壁画の剥落片に含まれていたコラーゲン由来ペプチド(GVQGP(O)PGPAGPR)のMS/MSスペクトル。ガスを衝突させることにより得られるペプチド分解物のピークが明瞭に判別でき、その情報からアミノ酸配列が推定できる。

呼ばれるアミノ酸の脱アミド化を示している。このようなアミノ酸レベルの修飾情報は、年代推定への応用やタンパク質の分解機構もしくは安定化機構の解明への応用としても期待できる。

文化財の質量分析例

前述の質量分析を基盤としたプロテオミクス技術により分析した主な例として、本学術領域に関係があるものとしては、アフガニスタンのバーミヤーン遺跡・東大仏の破片(図3)や、J. Paul Getty美術館(アメリカ)が所蔵するローマ期エジプトの三連祭壇画(A.D.180~200)の微量片について、それらの彩色に用いられた膠着材原料としてウシ由来コラーゲンを検出した例が挙げられる(Mazurek et al. 2014)。特に、バーミヤーン遺跡の分析例においては、わずか440マイクログラムの試料から分析結果が得られたことは、本手法の強みを感じられるのではないだろうか。

また、その他の興味深い分析例としては、関西大学との共同研究で行った紀元前2360年にエジプトで建設された地下墓であるマスタバ・イドウトの壁画の剥落片からウシの皮由来の動物膠が検出された例も挙げられる(図4)。

膠は動物の加工品であるため、化石やミネラルに囲まれている骨とは異なり、極めて分解しやすいと思われる状態であるにも関わらず、紀元前2360年のエジプトの壁画からその特定が可能であったのは驚くべきことである(Kawahara et al. 2012)。今後は、分析例をさらに増やし、古代西アジア文明を読み解く新たな視点を提供していくと同時に、これらのタンパク質がなぜ数千年の時を経ても現在まで分解を免れ、分析可能な状態で存在できたのかについても興味を持って研究を進めていく予定である。

引用文献

- Kawahara, K., Nakazawa, T., Kawasaki, H., Shoeib, A.S., Akarish, A., Suita, H., and Arakawa, R. 2012 *Semawy Menu* 4:227-234.
- Mazurek, J., Svoboda, M., Maish, J., Kawahara, K., Fukakusa, S., Nakazawa, T., and Taniguchi, Y. 2014 *e-Preserv. Sci.* 11:76-83.
- Schweitzer, M. H., Zheng, W., Organ, C. L., Avci, R., Suo, Z., Freimark, L. M., Lebleu, V. S., Duncan, M. B., Heiden, M. G. V. Neveu, J. M., Lane, W. S., Cottrell, J. S., Horner, J. R., Cantley, L. C., Kalluri, R., and Asara, J. M. 2009 *Science* 324:626-631.

中世イスラーム世界における 「古代」の継承と創造

亀谷 学

Kameya Manabu

北海道大学大学院文学研究科専門研究員

古代の西アジア世界と現代の西アジア世界の間には、大きな断絶があると感じられている。そしてそれは、中世において西アジア世界が大きく変容してしまったためだと考えられている。変容の主な要因とされているのは、西暦七世紀以降、イスラームという宗教を奉ずる人々がこの地を支配するようになったことである。

古代西アジア文明を代表する肥沃な三日月地帯、すなわち、イラクからシリア、エジプトに至る地域と、それに連なる周辺世界は、文明の黎明期から世代の先をゆく社会を構築してきた。その繁栄自体は、中世イスラーム世界にも受け継がれていたと言っているだろうが、これまでの近代西洋の観点から構築された「世界史」では、ギリシャ・ローマ文明の直接的な統治が行われなくなって以降は、その伝統から切り離して語られることが多く、イスラーム世界はなにか別個のものとして叙述されることが多かった。

実際の流れとしては、古代文明の上に、古代末期におけるキリスト教的な文明が積み重なり、さらにその上にイスラーム文明が積み重なったと言える。キリスト教とイスラームという宗教の相違が近代から見た断絶の主要因になっているものの、実際の面でも、「イスラームの言語」として使用されたアラビア語、後にはアラビア文字を使ったペルシャ語やトルコ語が著述の際の主要言語となったことで、古代西アジア世界で育まれた豊かな文字文化の伝統と切り離されてしまったと認識されている。実際、近代以降の歴史研究においても、中世西アジア世界の歴史は、ムハンマドから語り起こされる「イスラームの歴史」として構成されることが多く、その地域を通時的に扱ったものは稀である。

イスラームの観点からも、イスラーム以後の時代とそれ以前の時代には大きな断絶があるものと考えられて

いる。そもそも、イスラームにおいては、その教え自体が「ムハンマドによる、父祖アブラハムの宗教の復興」という歴史的なパースペクティブを備えているにもかかわらず、ムハンマド以前の時代をジャーヒリーヤ（無明時代、無知の時代）と位置づけ、原則としてムハンマド以前の時代に価値を見出さないという姿勢を持っている。

しかし、アラビア半島西部で形成されたであろうこの概念とは裏腹に、彼らが征服した西アジア・北アフリカ地域には、古代以来様々な文明が積み重なってできた社会が存在していたわけであり、イスラーム文明の形成は、そのような社会をイスラーム教徒を中心とする社会に吸収、再編成してゆく過程であった。

近年の「古代末期」研究の進展は、西アジア世界における文明の連続性にも目を向けさせるものとなっている。しかしその研究自体は、キリスト教の伝統に重きを置いたものであって、必ずしも古代文明以来の西アジア文明を十全に考えたものとも言えない。イスラーム世界における「世界の過去」に対する広がりや、聖書的世界観に収まりきれないものを多分に含んでいるからである。本公募研究では、一神教的な世界観を踏まえつつも、むしろそれ以外の要素を重点的に分析してゆくことによって、イスラーム世界の人々がどのように「古代」を認識していたのかについて、新たな視角をもたらすことが目的となる。それにあたって、以下の二つのアプローチの分析を行ってゆく。

イスラーム世界における古代へのアプローチの第一は、「世界史」の著述・編纂として行われた。それはすでに九世紀、アッバース朝初期の時代には始まっており、そこでは旧約聖書に示された一神教的な世界観を基本的な枠組みとしながら、イスラーム勢力が支配した地域、またそれと隣接する地域について、統合的に記述す



16世紀の驚異の書の中に描かれたピラミッド。Ibn Zunbul, *Qānūn al-Dunyā*, fol. 203b. (トプカプ宮殿博物館附属図書館蔵写本のマイクロフィルムより)。

كانت عداوة باينة مسمرة بينهم . وهذا صفة
 قلم الكلدانيين القديم .

ا ب ج د ه و ز ح ط
 . / . x . ~ . 9 . 4 . 3 . 8 . 5 . 7

ي ك ل م ن س ع ف
 . 1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 7 . 8 . 9

ص ق ر ش ت
 . 1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 7 . 8 . 9

図1 カルデア人の文字。Ibn Wahshīya, Aḥmad b. Abū Bakr, *Shawq al-Mustahām fī Ma'rifat Rumūz al-Aqlām (Ancient Alphabets and Hieroglyphic Characters Explained)*, London, 1806, p. 132.

るような歴史叙述が行われた。この時代に書かれ、現在まで伝わっている世界史書は、いわゆる官選のものではなく、学者が個人として書き残したものがほとんどであるが、ここで描かれた基本的な枠組みはイスラーム世

界の中で様々なヴァリエーションを生み出しながらも踏襲、再生産されてゆくことになった。そしてその際には、一神教的なものではない、個々の地域に残る文明伝統が反映されてゆくことになる。

以上のような背景を踏まえつつ、研究協力者である大塚修(東京大学)、松本隆志(中央大学)の協力のもと、西暦9世紀末頃に著されたタバリーの『諸預言者と諸王の歴史』と、ヤアクービーの『歴史』の比較検討を行う。そしてそれにアッバース朝期における世界史の枠組みとそれに対する西アジア文明の伝統の影響関係を探究するとともに、その叙法についても、イスラーム以前の時代とイスラーム以後の時代の叙述にどのような差異が見られるかについて検討する。

また、中世イスラーム世界におけるもう一つの古代に対するアプローチとしては、古代に由来する建造物、遺跡などについての探究が挙げられる。最もわかりやすい例はエジプトのピラミッドである。アッバース朝第七代カリフであるマアムーンは、西暦831年に自らエジプトを訪れた際に、ギザのピラミッドの内部を探查すべく現在まで残る横穴を開けさせ、内部の空洞を発見したと言われている。さらに西暦13世紀、アイユーブ朝期のエジ



旧約聖書に登場する預言者ダニエルが埋葬されたとされる巨大な石棺。(2015年著者撮影)

プトに活躍したイドリースー(シチリア王のもとで世界地図を作った人物とは別人)は、ピラミッドについての史上初の专著と考えられる『ピラミッドの秘密』を書き残した。その中では、伝承をもとにピラミッドが建設された年代や建設した人物について検討されているだけではなく、著者本人を初めとして、実地に古代遺跡を検分し、その謎に迫ろうと探究を行っていた人々がいたということが窺えるのである。

ピラミッドほど有名な建造物ではないが、アラビア半島に残る「巨人の墓」も古代から中世へと受け継がれた遺跡として、イスラーム世界の記述の中に残されている。代表的なものは、ムハンマド以前に存在したという巨人族・アード族の預言者フードの墓とされるものである。また、地域的にはやや離れるが、ウズベキスタンのサマルカンドにも「ダニエル廟」とされている巨大な棺が聖地として祀られており、宗教の垣根を越えた崇拜の対象となっている。これらが古代からどのようにして継承されたか、継承されたと考えられているかを検討することによって、中世イスラーム世界において古代というものがどのような位置に置かれていたかについて考察する。

また、「古代の文字」についても関心が払われていた。

صفة قلم اخر من اقلام الكلدانيين

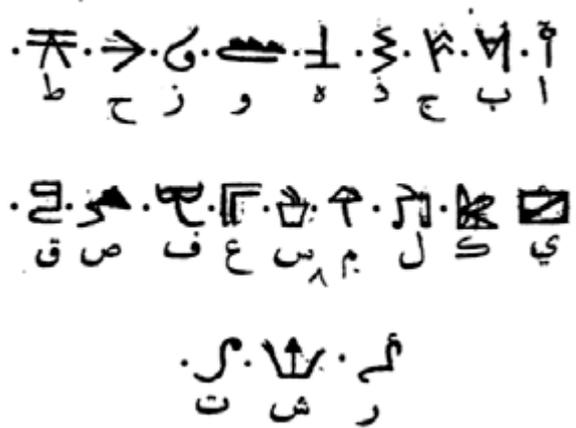


図2 もうひとつのカルデア人の文字。Ibn Wahshīya, p. 133.

ヒジュラ暦413年(西暦1022年)に書かれたという『様々な文字記号についての知識への偏愛』という書物の中では、アラビア文字から始まって、各惑星の文字や、十二宮の文字など様々な文字群が紹介されているが、その中には、古代の文字とされるものも多く含まれている。

例えば「古いカルデア人の文字」として図1、図2のようなものが示されているし、またヒエログリフを模したと思われる図3のようなものも採録されている。もちろんこれらが直接に実在の「文字」に取材したものであるかには大きな疑問があるものの、少なくとも古代文明の遺産を読み解こうとすることへの願望が読み取れるのである。

以上のような古代文明の「痕跡」についての記述は、体系的にまとめられることこそ少なかったが、イスラ-

ム世界で記された様々な書物の中に残されている。本公募研究では、そのような古代について知ろうとする探究の痕跡を拾い集めることによって、彼らが持っていた古代観を再構築し、彼らがどのように古代なるものを継承し、また時に彼ら自身の世界に適合するように創造していったのか、という問題について考えてみたい。それによって、古代西アジア世界を通時的に見る際の手がかりを見つけられると期待している。



図3 ヒエログリフから取材したと思われる「ヘルメス文字」。Ibn Wahshiya, p. 82.

2014年イラン調査報告



IGCP589巡検中の風景

安間 了

Ryo Annma

筑波大学生命環境系・講師

10月17日

西アジアと英語の授業。科研費の書類を二件出して、ようやくほっとする。今日は朝からなにも食べていない。出発したのは18時過ぎになった。成田空港でお土産を買い足しに行くが、まだ8時半というのにはほとんどの店はもう閉まっている。食事を取りに行くと、レストランもほとんど閉まっている。鮓を食べてから、出国審査。内側の店も、活気なく閉まりかけている。これが資本主義国家の玄関口か？

10月18日

朝の4時にドーハ着。レストランで赤ワインを飲みながらチーズをつまむ。7時20分発テヘラン行きにのる。ペルシャ湾からザグロス山脈が立ち上がっていくのを眺める。空港ではすべての荷物をX線にかけるが、問題なく通過する。ややあっけない感じである。GSIから出迎えの女性とドライバーが迎えてくれる。極真会空手をやっていたというGSIのドライバーがホテルまでピックアップを運転してくれる。ホテルでは別の女の子が待っていて助けてくれる。ホテルのフロントの女性も流暢に英語を話す。そぞろ歩きをして、14時頃まで休んでいると、モニレさんから電話があり、ロビーで落ち合うことにする。そうこうしているうちに福岡大学の上野さんと筑波大学の鎌田さんも到着。サニードもいる。お世話をしてくれる二人にお土産をあげる。パリで学位を取ったという地球物理・テクトニクスが専門のベドラムさんの家に招待されているということで、家のあるテヘラン北郊までタクシーで移動する。八木さんや丸岡さんたちもすでに到着している。豪勢な家具や絨毯を鑑賞しながら皆で雑談をする。いつもながら、豪勢な食事で余らすのはもったいないが、とても食べきれない量ではない。かわいらしい子

どもが二人いる。食後も雑談をするが、夜が更ける前に辞去する。

10月19日から26日にかけて行われたInternational Geological Correlation Project (IGCP) 589 “Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes”会議についてはニュースレター第5号(久田ほか)と地質学会ニュースレターに別途報告があるので詳細は省略するが、アジアの優秀な研究者が一堂に会し、実りの多いものであった。会議初日にはイラン各地で降水の採取をしてくれているシバ・メラバニさんが友達と会議場まできてくれる。雨水採取プロジェクトの推進のための道具立て、手伝ってくれている人たちへのお礼を渡す。今後カスピ海沿岸での雨水採取が可能か検討することにした。二日目には前年の調査を共にしたナジャリさんが会いに来てくれる。今年もサナンダジの調査にも同行してくれるということで再会を約す。IGCP589の巡検は、アルボーズ山脈とイラン中央部を巡り、たいへん実りが多かった。アルボーズの層序が、イラン全体の層序の基礎になっているので、プレ会議巡検でアルボーズを巡って層序を一通り見たのが、ポスト会議巡検でみた地層の理解のために非常に役に立った。ほぼ全面露頭であるので、バスに乗りながらマッピングができる。一番面白かったのは顕著な活断層地形がたくさん見られたことであった。Khonsar東方の活断層地形と山頂付近の二重稜線の発達は見事なものであった。Com西方でも、San Andres断層あたりで見られそうな地形がたいへんきれいに出現している。26日夕方18時すぎにバスでテヘランのHoweizehホテル着。すでに夜の帳がおりていて、モスクは照明に輝いている。これにて19日から開催されていたIGCP589の日程はすべて終了した。巡検・シンポジウムの期間中、終始親切丁寧な対応をしていただ



アルボーズ山脈でのIGCP589巡検

ものせた方がよい旨を指摘しておく。協力研究分野についてもこれでよいということである。日本側から成案を送ってくれば、一言一句変えずに協定案にサインするように取りはからうということであった。将来のプロジェクトについて雑談する。地質の基本的なところはできているし、資源の開発についてはすでに中国がかなり入ってきているようであるので、活構造と減災が適当なプロジェクトではないかという点で合意した。IGCPの巡検中にみた活断層などの地形について、地質と比べながら検討した。現在やっているオフィオライトのプロジェクトについても話

いた関係者一同に厚くお礼を申し上げる。

10月27日

本日から調査の日程に入る。今回の現地調査については出発前に仕事が重なってしまい、事前の打ち合わせと準備に時間をとれなかったのが、相当の不安がある。会議のために発行してもらったビザが明日で切れてしまうので、まずはビザの延長手続きである。オフィスに行くつもりで写真とパスポートのコピーを用意して待機していると、GSIで延長手続きができるのでパスポートのコピーをメールで送れとモニレさんが電話してくる。写真に撮って送るが、後はなにも言ってこない。待機している間にホテルで巡検経路の地形をGoogle Earthで確認する。午後になってもなにも連絡してこないのので、試料の整理と、輸出のための算段をする。16時頃にもう一度モニレさんに電話すると、ホテルのロビーにいるという。最後の出発組の見送りに来たらしい。見送った後、明日からの打ち合わせをする。バスは12時半に出発するものが一番早いと言うこと。結局ビザは受け取れなかったのが、明後日サナンダジの警察署で受け取る手はずにしたようである。やや不安が残る。

部屋に戻ってテヘラン大学との二大学間協定の文案を検討していると、カウンターパートのバロウディさんがフロントから電話をかけてくる。6時半をめざして来ると言っていたが、時間通りである。夕食を食べている時間はなさそうなので、早速協定の文案の検討に入る。日本側の論理を押しつけた文案であると思うが、リーズナブルであるといってくれたので、ほっとした。日本側の貿易令については明記してあるが、イラン側の法規について

して情報を得る。Comあたりの岩塩ドームでは掘削してガス貯蔵を試みているという。アフガンとの国境地帯もBirjandあたりまでは大丈夫ということである。再会を約して別れる。

夕食はホテルで魚のステーキ、というのを頼んでみたが、魚のカバブ(ステーキより10000リヤル安い)がステーキプレートにのってきただけの話であった。

10月28日

今日は11時に約束しているので、午前中は荷物の整理をする。10時半頃には支度が調い、預ける荷物をロビーに下ろすとすでにモニレさんが来ている。タクシーに乗って、サナンダジ行きの長距離バスが出るバスセンターへ向かう。バスセンターには運行会社がたくさん建ち並び、けっこうな喧噪である。ペルシャ語ばかりで、外国人には敷居が高い。2階の食堂でマスのフライを食べたが、さっぱりした料理で、こちらに来てから食べた魚の中で一番おいしかった。

バスは3列の座席で座り心地もよく、空間も広くとっている。日本の長距離バスよりもよい。簡単なスナックもつけてくれる。これでサナンダジまで12ドル程度というから安いものだ。ハマダン(昔日のエクバタナ)を經由してサナンダジへ。途中で何度か休憩を入れるが、風が冷たい。

8時半頃にサナンダジのバス停に到着。アジジさんとナジャリさんがバス停で待っていてくれる。再会を喜び合い、モニレさんを紹介する。夜はアジジさんがつくってくれる。明日・明後日の予定を立てて、早めに寝ることにする。



アルボーズ山脈で観察した褶曲構造 (IGCP589巡検)

10月29日

朝7時に起きる。アジジさんが朝食を用意してくれる。チーズと蜂蜜の簡単なものであるが、十分でおいしい。ビザ延長の書類が届かないということで、8時過ぎまで待つが、今日中には片付きそうもないのでフィールドに出ることにする。結局10時頃に出発となってしまった。午前中はKamyaranから西へ向かい、西側のガブロの岩体を見る。変形を受けてはいるが、組織はマグマティックである。乗用車でいけるところまでドライブし、同じ道を引き返す。このセクションではマントル境界も、シート状岩体との境界も観察できない。ガブロにチャート・砕屑岩が直接にのっている部分があるようである。中央部のシート状岩脈群が記載されている地域を偵察する。プラスチックな変形を受けた変玄武岩の中にドレイイトの岩脈が入っている。ステージが明らかに異なるもので、海洋性のものとは思えない。ガブロも海洋地殻のもの、島弧的な貫入性のもの(変成帯を伴う)が混在しているようである。少し北に戻った道沿いのレストランでdeziを食す。

午後(といっても2時過ぎ)からは、前回いったKamyaran東の枕状溶岩とシート状岩脈の露頭にモニレさんを案内する。ここから見える海洋地殻の構造について説明すると、とても喜んでくれて、アナガバティさんに1/5万でマッピングするように進言してくれるとのこと。

帰途につくが、ブレーキシューがすり減っているらしく、車輪から変な音がする。

晩にはアジジさんがカスピ海産の白身魚をフライしてくれる。とてもうまい。ニュースを聞いていると、国会で文部大臣の問責決議が採択され、罷免されるということである。大学でコンサートを開かせたとか、男女混合の催しにお金を出したとか、開明的なことをやろうとしたのが嫌われたらしい。これで先日バロウディさんが言っていたように、テヘラン大学学長と文部大臣が入れ替わる人事が進むことであろう。大学協定を進めるには、よい時期である。バロウディさんに地質図を送ってもらったので、お礼を書く。モニレさんからオフィオライト関係の地質図をもらった。資料が着実にそろいつつある。

10月30日

朝8時にモニレさんがGSIのサナンダジ支所に電話すると、書類ができているということで、ビザの延長をすませることにする。8時半過ぎにGSIサナンダジ支所長のモラディさんが書類をもって迎えに来てくれる。そのままサナンダジ支所まで車で行き、坂を下ったすぐの入国管理局へ行く。親切に対応してくれるが、ビザの延長はここではないということで、歩いて5分ほどの警察署までタクシーでいく。銃を持った緑色の軍服の人たちが入り口を固めている。ビザの手続きは2階だということで上がった



イラン中央部のキャラバンサライ (IGCP589巡検)

ていくと、強面のあにさんたちが仕切っている。我々のあとから来た人はイラクの国境を越えてきて、親戚の家につい居続けてしまったらしい。半年近くも前にビザが切れているらしく、ものすごい剣幕で「おまえはイランの法律を馬鹿にしている。牢獄行きだ!」と怒鳴られている。けなげに言い訳をしていたが、最後はどうなったかしらん。20分も待っている間にそんなやりとりを聞かされていたが、こちらは無事にビザの延長をしてもらい10時前にアジジさんのうちに帰る。車を修理してきたというので、そのままフィールドに出る。本日のターゲットは、古環境変動解析にもってこいの鍾乳石である。昨日訪ねた Kamyaran から南西に進路をとり、ザグロス山脈の最初の一峯を越え、平野に出る。そこからは平野に沿って北西にむかう。一時間ほどでグリ・ガレ洞窟に到着する。このあたりでは有名な鍾乳洞らしい。乾期であるし、洞窟の中はあまり水が多くない。それでも奥で上からぼたぼた水の落ちているところを見つけて採水する。観光地であるのでサンプリングは洞窟の入り口の管理人さんをお願いし、洞窟を整備するときに掘り出して、そこらに捨ててある鍾乳石から見繕って採取する。けれども、どうも見慣れた鍾乳洞とは雰囲気が違う。更新世あたりの礫岩の上にトラバーチンの地層が乗っかっており、そのなかに鍾乳洞が発達している。そとにでて、カバブを少し

焼いてもらう。

10月31日

アジジさんは朝食にオムレツを、柔らかくて、じつにうまく作ってくれる。アジジさんと論文の英文校閲の打ち合わせをした後、それぞれ仕事をする。ナジャリさんは3本目の論文を執筆中とのことである。日本に留学したいという人は多いようだ。Samurai music というのを画像つきで聞かせてくれる。サムライのイメージに関しては、日本は数百年前の遺産で食いつないでいるようなものである。お昼はハマダンへの街道を東にはいった渓谷の中のレストランで食す。魚のフライがおいしいが、ヨーグルトもピクルスもプラスチックの容器で来る。いろいろ雑事を片付けていると、あっという間に時間がたってしまう。明日からアジジさんは用事があるというので、アリ・サードルの洞窟を尋ね、ハマダンでシバさんと落ち合うことにする。夜はレンズ豆のスープ。デザートはザクロがおいしい。

11月1日

朝5時半起床。夜半より雷鳴がとどろき、驟雨となる。支度をして、チーズと蜂蜜で軽い朝食。アジジさんとナジャリさんにバスターミナルまで送ってもらう。小雨のな



IGCP589の巡検風景。珍しい化石に魅入る



ザグロス山脈にみられる活断層地形と二重山稜 (IGCP589巡検)

か、アジジさんがタクシーの運転手と交渉してくれる。うまいこと、オフィシャルなタクシーの運転手を捜してくれたらしい。そのままアリ・サードル経由でハマダンまでいってくれるとのこと。アリ・サードルで二時間の待ち料金も含めて交渉してくれたようである。このあたり、じつに親切な人である。別れを惜しんで、タクシーに乗り込む。

ハマダン北西20kmくらいから左に折れ、アリ・サードルには9時頃に到着する。閑散としていて、誰もいないようであるが、店の準備に来ている人に入り口を聞いて進むと、ちゃんと開いている。チケットを買って、中に入る。すばらしい洞窟である。管理が行き届いているうえ、鍾乳洞の規模、美しさとしても第一級である。古環境復元のためにどうしてもほしい試料であるが、とても石をたたいて持って行けるようなところではない。残されている手は案内をしてくれるレンジャーの人への誘導尋問である。当然であるが、地元の人の中には鍾乳石のコレクションをもっている人がいる。うまく所在を聞き出して、あとは膝詰め談判である。わけのわからない外国人がいきなり訪ねてくる、イラン地調のお姉さんも迫力で

あるが、タクシーの運転手までついてきて「何とかしたれや」と口を挟むのだから、哀れなのは村人である。みてくれは落ちるが研究用にはもってこいの試料を見事にせしめることができた。モニレさんもきれいなピースをもらっている。お礼にお金を払おうとするがこれは受け取ってくれない。日本からもってきた小さなお土産を渡してお礼を言う。じつに気高い人たちである。周囲の地質をしぼらく見る。変形した中生代の石灰岩である。

戦果に満足してハマダンへ移動、バスセンターでシバさんと落ち合う。タクシーの運転手とはここで別れるが、料金の交渉が始まる。口を挟む余地がないので、モニレさんにお任せである。結局少し上乗せしたようで、おたがいハッピーで別れるが、相場がどのくらいなのかさっぱりわからない。シバさんはこの一年間、イラン国内に散らばる4カ所で一月おきに採取した雨水を濾過して、フィルターと濾過した水をセットでもってきてくれる。完璧な仕事である。これらは、そのときにしかとれない貴重な試料である。こちらは100mlもあれば必要な分析はできるので、残りはアーカイブとしてシバさんに保存して



IGCP589巡検中の食事風景



グリ・ガレ洞窟の発達するトラバーチン

おいてくれるように頼み、100mlずつを持ち帰ることにする。来年度は彼女を日本に招待し、分析を一緒にしてもらおう予定である。お礼を言って別れ、ここからはバスに乗り換え、テヘランまで行く。モニレさんも疲れたであろう。

11月2日

朝はゆっくりホテルで8時半過ぎに食事。荷物の整理をする。必要のない試料をGSIにおいておけば、問題なく30kgで収まりそうである。モニレさんが12時半頃にきてくれる。一緒にアメリカ大使館跡まで歩いて地下鉄に乗る。アメリカ大使館は庭の松も枯れていて、寂れた様子である。教育関係の機関が入っているようである。通りに面した壁にはアメリカを風刺する絵が描かれている。

地下鉄の駅から歩いて5分くらいでモニレさんのアパートにいたる。モニレさんの姉、妹、甥っ子に姪たちポンユトコーヒの一族が来ている。昨年も会った顔ぶれである。モニレさんが手料理を振る舞ってくれる。昨晚もずいぶん遅くなったが、今朝早くから準備をしてくれていたものらしい。妹さんはケーキを焼いてくれたのもってきてくれた。恐縮であるが、遠慮なくいただく。弟さんのアクバルさんとダマヴァンドまでドライブすると、ポン

ユトコーヒ兄弟の別荘が並んで立っている。地震があったらちょっと怖い作りであるが、見た目はモダンである。帰りは甥御のケイヴァンさんに送ってもらう。アシュラの行進をやっている。

11月3日

5時半に起床、日本に電話して雨の採取の仕方について確認する。7時におりるとモニレさんが時間ぴたりに来ている。運転をしてくれる甥御のシナさんとその嫁のパホラックさんと一緒に出発。今日はIGCP巡検1日目と同じルートを通るので、1日目に作ったスケッチを確認しながら行く。間が飛んでいるセクションも多く、やはり使えたものではない。もっと時間をかけて断面図を作製する必要がある。2週間前よりも木の葉が色づいている。峠に近づくと雪になる。外気温は0度であるが、結構な降り方で、帰りがやや心配になるが、成り行きに任せざるほかない。雨ではなく、雪をサンプリングすることができそうである。峠を越えたところのレストランで朝食。9時半である。クリームと蜂蜜をパンにつけて食べる。簡単なものであるが、とてもおいしい。カスピ海より下っていくと温度は6度くらいまで上がり、雪は雨に変わる。が、Kelardashtに向かって上がっていくと、再び雪にな



アリ・サードル洞窟の鍾乳石(1)



アリ・サードル洞窟の鍾乳石(2)

る。すっかり雪景色になった別荘についたのは12時過ぎである。

兄君のホスローさんと奥さんが迎えてくれる。フルーツやお菓子をいただきながら話をしていると、2時過ぎからお昼。豆と野菜のスープに始まって、羊肉の煮物、鶏肉の入ったサフランライス。ふつうのサフランライスが別についている。羊肉は軟らかくてうまい。少し話をして、昼寝を6時過ぎまでとる。ホスローさん、シナさんと買い物に出る。町のロータリーあたりが市場になっていて、アシュラの夜でもやっている。野菜と調味料、その場でさばいてくれる羊肉と鶏肉を買う。夜は羊のもも肉の入った野菜スープ、羊肉のたたいたのをさつとゆでたもの、鶏肉、トマトとジャガイモの煮物。どれもとてもおいしい。9時頃に食事をとっていると、突然停電する。石油ランプに灯をともして、とても雰囲気の良い夕食となった。食事後は、だんだん寒くなっていくホールで毛布をかぶって団らん。しばらくは復旧しそうもないが、話が弾む。

11月4日

7時過ぎに起床する。雪は7cmほど積もった。雪をサンプリングした後に庭に出る。川から水を引き込んで

庭園にしている。積もった雪で、木が2~3本折れている。普通ならば葉が落ちてから雪が降るのだろうが、葉っぱが雪の重みを支えてしまって折れたようである。8cmくらいの径の木も折れている。木から雪を落とすのを手伝う。ホスローさんは、丁寧に一本ずつ雪を払っている。サニさんはアダナ・カバブをつくるため、羊肉を大きな半月包丁でたたいている。肉の水分・うまみが残って、機械でやるよりもおいしいそうだ。

朝はオムレツに、卵・小麦粉・砂糖をサフランと一緒に揚げたスイーツ(これは郷土料理だそうだ)、ホットケーキ。サニさんは食後も肉をたたく。昨晚積もった雪を回収し、バスルームで解かしておいたのを、ボトルに詰める。これで、今年度分についてはほぼ完全な水試料がそろった。ホスローさんの運転で、カスピ海まで出る。日本の林と変わらない風景。小雨であるが、こちらの人はすばらしい天気だという。乾ききった南に住んでいれば、雨もうれしいのであろう。海岸で貝を拾う。帰りがけに森の写真を撮る。

帰ってしばらくすると、ホスローさんの友達のイスマイルさんが来て、一緒にカバブの支度を始める。シナさんは丁寧に串に肉を巻き付けている。庭にしつらえたグリルに火をおこし、トマト、玉葱、ニンニク、青唐

辛子から焼き始める。トマトには切れ目をいれ、玉葱とニンニクは上だけちよん切ってオリーブ油を流し込む。獵をしてとったという山羊の肉を焼いてくれる。こちらはおきで、つまみ食いをしながら、ゆっくり焼いていく。カバブはしたたり落ちる油に火がついてもかまわずに、強火でざっと焼いていく。部屋に入って遅い昼食。終わったときは18時近い。自家製のブドウの飲料はびっくりするくらい良くできている。

11月5日

今日も朝から雪である。テヘランまで戻れるか？朝食時にレザーハーンの乳飲み子であったときの逸話を聞く。レザーハーンはアルボルス出身だそうで、乳飲み子のときにテヘランまで馬に揺られていたとき、悪天候にあって一時冷たくなっていたそうだ。そこで馬の首に

当てて暖めると息を吹き返して、のちに王となったのだという。ホスローさんがタクシーを呼んでくれる。短い間であったが、じつに心づくしのもてなしに感謝する。モニレさんと一路テヘランへ。峠を越せるか心配であったが、道には雪はほとんど積もっておらず、無事に通過する。ホテルに戻り、荷物をとってそのまま空港へ。礼をいい、再会を約して別れる。イランの人たちはじつに親切である。とくにパーレビ時代の自由な雰囲気(退廃しすぎていて、揺れ戻しも当然だよ、という人もいた)を知っている人は何となく優しい。

イラン地質調査所のモニレ・ポシュトコーヒさん、クルディスタン大学のフセイン・アジジさん、シバ・メラバニさんたちにはたいへんお世話になった。ここに記して感謝する。



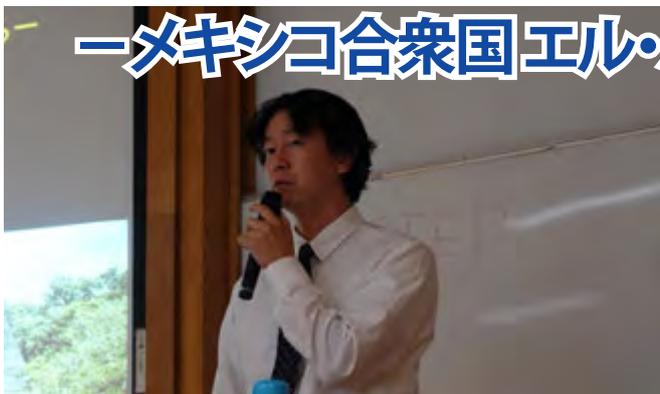
モニレさん(右から二人目)の家族と一緒にカスピ海近くで



カバブ奉行のイスマイルさん

古代マヤ文明の広場

ーメキシコ合衆国エル・パルマール遺跡からー



塚本憲一郎

Kenichiro Tsukamoto

日本学術振興会 特別研究員SPD

古代マヤ文明は、紀元前1000年頃からスペイン征服者たちが侵入する16世紀頃まで、現在のメキシコ南東部、グアテマラ、ベリーズ、ホンジュラス西部において栄えました。古代マヤ文明では統一王朝が成立しなかったのですが、後400年頃までにはいくつかの集落が王朝を創設し、そこから都市国家群へと変容しました。私は、都市国家の形成過程を主たる研究領域にしており、博士論文では広場に注目しました。

古代マヤ文明の研究では、これまで神殿ピラミッドや宮殿などに関心が集中してきた一方で、広場は主題として着目されませんでした。しかし、これまでの調査によって、ほぼすべてのマヤ都市群に広場が確認されています。中心部に整備された大広場は、都市の総人口を一度に収容できる機能を有していました。石碑に刻まれた図像やマヤ文字には、広場に集まった大観衆を前に、盛大な儀式をおこなう王たちの様子が刻まれています。そのため古代マヤの広場は、王権を正統化するための場であると解釈されてきました。しかし、広場における儀式は、王との対面だけでなく、さまざまな社会集団が交流する重要な営みだったはずです。マヤ遺跡群での発掘調査の成果は、多くの人々の共同作業による広場の増改築を明らかにしています。また、都市の中心部だけでなく、周縁部にも複数の広場が報告されています。つまり古代マヤ文明における都市形成のプロセスを説明するには、都市における広場の役割を明らかにしなければならぬと考えました。都市の中心部にある広場も重要ですが、博士論文では都市周縁部の広場も研究の対象に加えました。それらの調査によって、広場の建設や増改築による都市空間の変化と、都市の内部や都市間における社会関係の変化との相関性について検討しました。

これらの課題を解決するために、メキシコのカンペチェ州南東部にあるエル・パルマール遺跡を調査対象に選びました。カンペチェ州南東部は、大きな河川が無く、石灰岩質の大地に熱帯雨林が広がるマヤ低地南部地域です。エル・パルマール遺跡は、1936年にイギリス人考古学者のエリック・トンプソンによって発見されました。彼がこの遺跡にある大建造物群や数多くの石造記念碑を報告したことによって、その後、何人もの考古学者たちが古代マヤ通史におけるエル・パルマールの重要性を指摘しましたが、学術調査は継続されませんでした。

2004年に、カンペチェ州南東部にある別の遺跡を調査していた私は、エル・パルマール遺跡の重要性に気づき、2007年より調査団長としてエル・パルマール考古学プロジェクトを組織しました。2015年の現在も継続している同プロジェクトは、日本人、アメリカ人、メキシコ人で構成された国際チームによって、学際的な調査を実施しています。現地調査では、遺跡の踏査や三次元測量調査、発掘などの考古学調査に加えて、石碑や祭壇に刻まれたマヤ文字の解読作業も進めてきました。また、米国アリゾナ大学、メキシコ国立自治大学、メキシコ国立人類学・歴史学大学の協力のもと、出土した遺物を理化学的に分析しました。

これまでの調査成果を、平成27年5月29日に筑波大学総合研究棟A110において報告しました。以下に、その概要を述べます。踏査と三次元測量調査により、エル・パルマール遺跡は中心部とその周りに散在する8つの周縁建造グループ群から構成され、総面積は10平方キロメートルを超すことが判明しました。中心部では高さ30メートルに達する2基のピラミッド神殿、約100基の建造物群、宮殿、球技場、堤道、そして8つの広場を測

量しました。また、広場に建立された33体の石碑と13体の祭壇も確認しました。それらの石造記念碑に刻まれたマヤ文字の解読により、9世紀末頃まで続いた王朝の存在が明らかになりました。

2009年の調査では、中心部にある8か所の広場をすべて試掘し、都市形成の過程における広場と儀式の役割を考察しました。遺跡の編年を確立するために、層位分析に土器分析と放射性炭素年代測定を組み合わせたベイズ統計法を用いました。その結果から判断すると、後400年から600年頃に、エル・パルマールの都市景観が劇的に変化した可能性が高いようです。都市の人口を一度に収容できる大広場が建設されると同時に、人の出入りを極端に制限した別の広場が地上10メートルの石積み基壇上に設けられました。後者の広場は、王権の支配体制による社会格差の広がり示唆しています。この頃には、他の諸都市との関係も変化しました。出土した土器の胎土を偏光顕微鏡によって分析し、粒子励起X線分光法(PIXE)を用いて黒曜石製石器の原産地を同定した結果、広場の整備にともなって、マヤ高地にある諸都市との遠距離交易も活発化したことがわかりました。これらの成果は、広場の建設や増改築による都市空間の変化と社会関係の変化との相関性を強く示唆しています。

続いて、都市の中心部から1.3キロメートル北にある周縁部の広場を、2010年から2014年まで調査しました。その結果、後600年までに確立されたエル・パルマールの権力関係は流動的であったことがわかりました。北周縁部にある広場の東側に建てられた小さな神殿には、マヤ文字が刻まれた階段が備えられていました。階段には、他国を統治する諸王との関係を強調することによって、エル・パルマール王を軽視する役人の自伝碑文が刻まれていました。碑文階段の建設と同時に広場も整備されており、役人たちはエル・パルマール王も参加した広場での儀式によって政治的地位の向上を図ったと推測されます。

これらの調査成果から、私は古代マヤ文明における広場が、王権を正統化するために建設、利用されただけではないと考えます。王族とは異なる集団が広場の建設や儀式に主体的に関わることで、社会地位の再分配を試みる、政治空間としても機能していたと結論づけま

した。以上の成果は、博士論文の指導教官であったアリゾナ大学の猪俣健教授と私が編集を担当した『Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power』にも掲載されています。今後の調査では、エル・パルマール王朝の役人たちに着目し、彼らによって都市国家がどのように変容したのかを解明する予定です。

文末になりますが、研究成果を報告する機会を与えてくださった筑波大学生命環境系の丸岡照幸准教授に御礼申し上げます。また、多忙なスケジュールを調整されて報告会にお越しいただき、有益なコメントや質問によって、活発な議論の場を提供してくださった筑波大学の先生方ならびに学生の皆様に、この場をお借りして感謝いたします。

Tsukamoto, Kenichiro and Takeshi Inomata (Editors) 2014 *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, The University of Arizona Press, Tucson.

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「現代文明の基層としての古代西アジア文明」
計画研究9「多元素同位体分析による古代西アジアにおける古環境復元」(研究代表:丸岡照幸)

公開研究会

古代マヤ文明の広場

～メキシコ合衆国エル・パルマール遺跡から～

講演者
塚本 憲一郎 (青山学院大学)

2015年5月29日(金)
15:00 - 16:30
筑波大学総合研究棟A110
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken/>

申込み不要 入場無料

筑波大学 University of Tsukuba ICR 西アジア文明研究センター

イラク・クルディスタン自治区と スレイマニア博物館

牧野真理子

Mariko Makino

筑波大学大学院人文社会科学研究所大学院生

はじめに

イラク戦争の混乱の余波の中、襲撃・略奪によって甚大な被害を被ったバグダッドのイラク博物館であったが、約12年ぶりとなる2015年に再開館にこぎ着けた。この嬉しいニュースがある一方で、イラク国内における文化遺産を取り巻く状況は、昨今の政治情勢によって深刻さを増すばかりである。バグダッド博物館の再開館の前には、シリア・イラクでその活動の場を広げるISによる、モスル博物館を襲撃し、遺物を破壊する事件があり、またニムルド遺跡とハトラ遺跡の破壊を伝えるニュースも国際的な関心を集めた。今年6月には、特別号として、ユネスコが破壊の脅威にさらされるイラクの文化遺産を機関誌であるWorld Heritageの中で「イラクの遺産—危機に瀕する財宝 (Iraq's Heritage: A treasure under threat)」と題して特集を組んでおり、その状況の深刻さが窺える(写真1)。



写真1 ユネスコの機関誌World Heritage
(<http://whc.unesco.org/en/review/77>より引用)

一方で、イラク国内で自治区としての地位を確立したクルディスタン自治区では、2000年代以降外国隊を交えた考古学調査が徐々に増加しはじめていることは、以前の号(2014年8月号)のニュースレターの中でも紹介されている。そのイラク・クルディスタン自治区の中でもスレイマニア博物館は、中東地域を専門とする考古学者や文献学者から注目を集めている博物館の一つである。1960年代に設立されたこの博物館は、イラク国内でバグダッド博物館に次ぐ第二の規模を誇り、ハトラやニムルドといった遺跡の遺物や、未解読の粘土版文書など、中東地域の研究者にとって貴重な資料を数多く保有している。20年間に渡る事実上の閉館を経て、2000年に再び開館したこの博物館はユネスコと共同でマスター・プランを作成し、現在は移転・拡張の準備を進めている。今後、博物館が新たなマスター・プランとともに、近代的な博物館としてスレイマニアに開館されることが予定されている。

イラクの政治と文化財

メソポタミア文明の地で知られるイラクであるが、歴史を振り返れば博物館の在り方や考古遺物の取り巻く状況は、政治によって大いに左右されてきた。強力な国家の下で、イラクでは政権のイデオロギーや文化政策とともに博物館や考古学が発展してきた歴史があり、博物館が非常に政治色の濃い場であったということを指摘する研究者もいる。

オスマン帝国の解体後に、イギリスの主導で国境線が決定し成立したイラクは国家基盤の根拠に乏しい、多宗教・多民族社会の人工国家であり、ナショナル・ヒストリーやナショナル・アイデンティティの確立が歴代の政権の重要な課題とされ、集権的な官僚機構を基にし



写真2 世界遺産に登録されたエルビル城

た上からの国民統合が推進される過程で、イラクの地の歴史の特にメソポタミア文明といった古代文明にイラク人のアイデンティティの在処を見出そうとするような動きが政権の中で強まった(Baram 1983、1994; Goode 2007)。この背景には、イラク国民のアイデンティティとして、アラブ民族としての一体を第一に掲げる、汎アラブ主義、そしてイラク一国内での一体をめざすイラク一国内主義といった2つのイデオロギーの存在が指摘されている(Davis 1994、2005)。政権のイデオロギーによって大きく変化する文化政策も、イラクの博物館や考古学・文化財関連の事業をときに活発に、またときには衰退させることになった一因であろう。

オスマン帝国解体以前の19世紀後半からこの地には、欧米の研究者がすでに調査に訪れていたが、イラクの博物館や文化財において重要なイニシアチブは、英国人ガートルード・ベルによって1920年代にとられた。第一次世界大戦後の1921年に英の委任統治下で成立したイラク王国であったが、彼女の尽力によって1923年に後のバグダッドのイラク博物館の前身となる博物館が建設される(Basmachi 1976)。24年にはイラクとしては初の文化財法が制定されることとなった。

対欧米との外交・交渉の道具としての要素が強かった考古学や文化財事業は、30年代以降になると、教育制度と連動し、イラクの文化として認識されはじめ、イラク人の考古学者によって主導されるようになった(Bernhardsson 2005)。初期イスラーム期に関連した遺跡で文化財総局(Directorate General of Antiquities。その後1977年にState Organization of Antiquities and Heritageとなる)単独の発掘調査が開始されたことに加え、1936年には、初のイラク人の文化財総局総裁に就任したサティ・アルフスリ(Sati' al-Husri)

の尽力で、新たな文化財法が制定され、その後のイラクの文化財法制がしだいに形をととのえていくことになる。1945年には、文化財総局編纂の雑誌である「SUM-ER」の刊行が開始された。博物館も徐々にその数を増やしていき、1957年にはバグダッドのイラク博物館の新しい建物の建設が開始された。

1958年7月14日のクーデターによって、アブドゥルカーリム・カーシムが政権を奪取した。汎アラブ主義とは距離を置いて、イラク一国内主義者としての政治的立場をとったカーシム政権の時代には、メソポタミア文明への傾倒が見られ、メソポタミアにまつわるシンボルが革命記念式典のパレードの山車や、イラクの国章として採用された。イラク人の文化が推奨されたカーシム政権下では、民俗文化も推奨され、イラクの各地に図書館や博物館が建設されることとなる。また考古学遺跡での保存事業・修復作業への予算も革命後のカーシム政権期に増加した(Baqir 1960; 岡田 2002)。スレイマニア博物館の設立(1961年)もこの時期となる。

1968年以降に政権を掌握することになったバアス党政権下では、より大規模にメソポタミア文明をイラク人のアイデンティティと結びつけることが行われた。このような思想的背景もあって、政府は考古学や文化財事業を手厚く支援した。その政策の一環として、70年代のオイルブームによって獲得した莫大な石油収入を背景に、博物館の建設や、遺跡の整備、考古学調査への支出といった文化財関連事業に財政的な援助を行った。69年にはエルビル、キルクーク、バスラ、そして70年にはルマイサ、ラマディ、ナジャフ、カルバラといった各地への博物館の建設と、モスルやスレイマニアの博物館の新たな施設への移転を検討し始めている(al-Hasani 1970)。また、バビロンやウルといった主要遺跡の大規模な修復・整備事業も行われた。盗掘といった違法行為に対しても強力な政府のもと

で、厳しく対応が行われた(Rothfield 2009)。1977年以降に実施された、水資源開発に伴う遺跡の救済調査では、発掘経費をイラク側が負担するという条件もあって、海外の調査機関がこの調査に参加し、日本からも国士舘大学がダム建設で水没する遺跡の救済事業に参加し、ディヤーラ川流域のテル・グッバ遺跡等で発掘を行っている(岡田 2002)。1970年代のバース党そしてフセイン政権下で進められた、イラク人としての一体化を目指す文化政策のもとで、考古学や文化財関連事業はこれまでになく恩恵を受けた分野であった。

一面から見れば考古学や文化財関連事業に対しては非常に好意的な状況が続いたが70年代とは対照的に、80年代にイラン・イラク戦争が始まったことによって、考古学調査や文化財事業は徐々に衰退しはじめ、続く湾岸危機として2003年のフセイン政権の崩壊によりそれは決定的になった。

イラク・クルディスタン自治区

上記に述べたイラクの他の地域と対象的であるのがイラク北部のクルディスタン地域である。ジャルモ、シャニダールといった欧米の研究者による重大な発見が相次ぎ、40年代、50年代と中東の考古学において脚光をあびた。1950年代には、イラクの文化財総局の主導の下、クルディスタン地域でドカン・ダムとダルバンディ・ハーン・ダムの建設に伴う遺跡の救済措置の一環として考古学調査が行われたが、外国隊の受け入れは非常に限定的であった。加えて60年代70年代からはイラクの中央政府に対する自治要求運動が活発化し、80年代にはイラン・イラク戦争がはじまったことでクルディスタン地域での考古学調査自体が減少してしまう。一方クルディスタン地域以外では、60年代後半から70年代にかけてシメールやアッシリアに関連した遺跡を中心に調査数が増加している。

その状況が大きく変わったのは、90年代にイラク北部にクルドの自治区が成立してからである。湾岸戦争の終結後、92年クルディスタン地域政府(KRG)の誕生とともに成立したクルディスタン自治区であったが、2003年以降所謂イラク戦争後の政治プロセスではクルド政府の存在感が増し、2005年には公式に自治区としての地位を確立した。現在では独立した国家のように、政治・経済的な面で高度な自治を享受している。

文化財行政においても例外ではなく、2000年代以降は、これまでのイラクの中央政府の文化財総局の代わりに、KRGの文化財総局(The Directorate of Antiquities)が主導し、海外調査隊の受け入れを積極的に行っている。2007年には、ユネスコの協力の下、エルビル城の保



写真3 スレイマニア市内にかけられたシャイフ・マフムードの肖像

存・改修を目指すHCECRが設立され、2014年には世界遺産に登録がなされた(写真2)。

自治政府においては、Ministry of Municipality and Financeの管轄下にKRGの文化財総局があり、現在ではかつてPUK(クルディスタン愛国同盟)のゲリラ戦闘員であったという経歴をもつアブ・バキル(Abu Bakir Zain al-Deen)氏がトップに就任している。その下には文化財局(The Department of Antiquity)がエルビル、スレイマニア、ドホーク、ガルミヤン、ソランの各地域に展開されている。

スレイマニア

スレイマニアの地域は古くからZamwaとして知られていた。オスマン帝国とサファヴィー朝そしてその後のイラン系王朝の間のこの地は、17世紀後半から19世紀後半までクルド系のババンという有力な支配家系によって統治されており、現在のスレイマニアの町の設立は1784年になる。またスレイマニアの地はその歴史から見て、クルド・ナショナリズムにとって重要な意味を持つ土地である。第一次大戦後1919年にシャイフ・マフムード(写真3)がイギリスに対する反乱を開始し、後に「全クルディスタンの王」を宣言したのはこのスレイマニアであった(McDowell 2003)。

スレイマニア博物館

スレイマニア博物館はスレイマニア県のサリム・ストリートに所在している。博物館の正面右手の大きなレリーフが来場者の目を引く(写真4、5)。2000年代以降は、スレイマニアを含めた自治区内で、民俗博物館や、バース党時代の負の遺産(写真6、7)をテーマにした博物館など、新たにいくつかの博物館が開館しているが、同地域内で最も古くに建設されていたのが、考古学博物館であるスレイマニア博物館であった。この博物館が、イラクのクルディスタン自治区に開館したのは、各地に文化施設の建設を推奨していた、カーシム政権下のことで



写真4 スレイマニア博物館正面:向かって左手のレリーフはカラコシュ地区にあるDarband-i-Gaurのレリーフのレプリカである(2006年作成)



写真5 スレイマニア県のカラコシュのDarband-i-Gaurのレリーフ(<http://bot.gov.krd/sulaimaniya-province/history-and-heritage/gawar-strait-sculptures>より引用)

て就任したハシム・ハマ(Hasim Hama Abdullah)氏は、90年代後半から、クルディスタン自治区のテレビ局であるカーク・テレビ(Khak TV)で、地域の考古学の遺跡や歴史をテーマにした子供向けのドキュメンタリー番組の制作に携わっていたこともあり、文化財の歴史的な価値や

重要性を地域内に発信することに非常に熱心な人物である。2003年のバグダッド博物館の襲撃の際には、カマル・ラシード(Kamal Rasheed Raheem)氏らスレイマニア文化財局のスタッフと協力してハマ氏らスレイマニア博物館のスタッフがバグダッド博物館を支援しにスレイマニアから車を運転して赴いたという。また略奪・盗掘にあったイラク国内の遺物に関して、その国外への拡散を防ぐために、略奪品を持ち寄った人買い取りを申し出るといったユニークな方法を行っていたことでも知られている。

あった。カーシムが政権を奪取した1958年の7月14日革命の3周年の記念式典に併せてスレイマニア博物館が開館された。当時から考古遺物を中心に収蔵・展示する博物館で図書館を併設したものであった(Directorate General of Antiquities 1961)。

1968年以降のバース党政権下で、博物館は現在の博物館の敷地に移転するが、その後80年からはじまるイラン・イラク戦争、90年代の湾岸戦争そしてクルディスタン自治区内ではじまるPUKとKDP(クルディスタン民主党)間の内戦により、約20年間は事実上閉鎖をせまられた。両者での内戦が終結後、スレイマニアを基盤とするPUKのタラバーニ議長とヘロ・イブラヒム夫人による博物館への財政的な支援により、再開館への準備が進められた。

おわりに

こうしてスレイマニア博物館は2000年に新たなスタートをきった。2000年の再開館にあわせて館長とし

もともとスレイマニア博物館が収蔵していた、イラク国内の遺跡から出土したコレクションに加えて2005年から2006年には、ハマ氏らがスレイマニアで発見されたレリーフをもとに作成したレプリカが展示に加わり、新しさを加えている(写真8、9、10)。また、ユネスコとの共同で新たな展示スペースもオープンした(写真11)。今後はスレイマニア県近郊での遺跡の発掘が進み、出土

Red Security Museumの外観。建物はコンクリート製で、周囲には他の建物や電線が見える。



写真6 スレイマニアにあるRed Security Museum外観

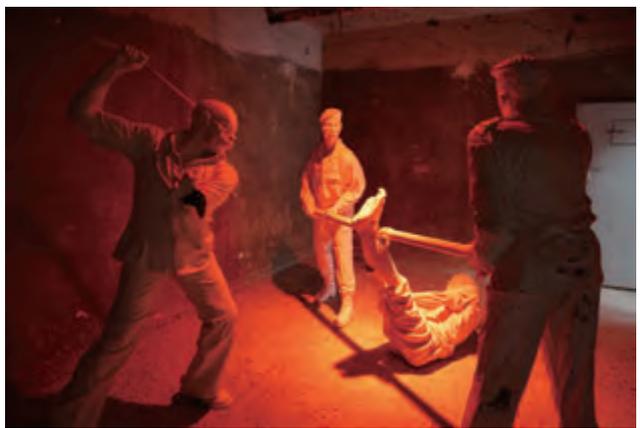


写真7 Red Security Museumの内部。バース党政権期の内務省の本部を博物館として開館させたもの



写真8 Qizqapanのレリーフのレプリカ(博物館に展示 2005年作成)



写真9 Qizqapanのレリーフ

遺物が博物館のコレクションに加わっていけば、展示はさらに充実していくだろう。

イラク・クルディスタン自治区はこの20年のうちにめまぐるしく社会・政治情勢が変化した地域である。中東地域の文化遺産をめぐる問題が緊迫感をますなかで、クルディスタン自治区においてどのような文化政策がとられていくのか、そしてスレイマニア博物館がどのような博物館として発展していくのか注目していきたい。

参考文献

- al-Hasani, S. 1970, "Reports, News and Correspondence", *Sumer* XXVI, no. 1&2, pp. 243-257.
- Baram, A. 1983, "Mesopotamian Identity in Ba'thi Iraq", *Middle Eastern Studies* 19, no. 4, pp. 426-455.
- Baram, A. 1994, "A Case of Imported Identity: The Modernizing Secular Ruling Elites of Iraq and the Concept of Mesopotamian-Inspired Territorial Nationalism, 1922-1992", *Poetics Today* 15, no. 2, pp. 279-319.
- Baqir, T. 1960, "Forward", *Sumer* XVI, no. 1&2.
- Basmachi, F. 1976, *Treasures of the Iraq Museum*, Al-Hurria Printing House Al-Jumhuriya Press, Baghdad.

Bernhardsson, M.T. 2005, *Reclaiming a Plundered Past: Archaeology and Nation Building in Modern Iraq*, University of Texas Press, Austin.

Davis, E. 1994, "The Museum and the Politics of Social Control in Modern Iraq" in *Commemorations: The Politics of National Identity*, ed. J. R. Gillis, Princeton University Press, Princeton, pp. 90-104.

Davis, E. 2005, *Memories of state : politics, history, and collective identity in modern Iraq*, University of California Press.

Directorate General of Antiquities 1961, "News and Correspondence (in Arabic)", *Sumer* XVII, no. 1&2, pp. 217-234.

Goode, J.F. 2007, *Negotiation for the Past: archaeology, nationalism, and diplomacy in the Middle East, 1919-1941*, University of Texas Press, Austin.

McDowell, D. 2003, *A modern history of the Kurds*, I.B. Tauris, London.

Rothfield, L. 2009, *The Rape of Mesopotamia; Behind the Looting of the Iraq Museum*, The University of Chicago Press, Chicago.

岡田保良 2002 「近代イラクの文化遺産をめぐる国際協力と保護法制」『ラーフィダーン』XXIII, 69-79頁。



写真10 Mier-Qulyのレリーフのレプリカ(博物館に展示 2006年作成)



写真11 ユネスコとのタイアップで新設された展示スペース

主要研究成果

2014年6月～2015年6月

計画研究1 (A01): 西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—

出版物

- 常木 晃 2014 「領域横断シンポジウム「西アジア文明学の創出1: 今なぜ西アジア文明なのか」を終えて」『現代文明の基層としての古代西アジア文明Newsletter』4号 1-6頁。
- 常木 晃 2014 「現代文明の基層としての古代西アジア文明」『JGL ニュースレター』Vol. 10 No.4 日本地球惑星科学連合。
- 常木 晃 2014 「西アジア文明学の提唱」『都市文明へ』筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 2-8, 158-173頁。
- 常木 晃(監修著) 2014 「研究最前線 西アジアの地で農耕社会開始を探究する」『週刊 地球46億年の旅45号 最終氷期の終焉』朝日新聞出版 17, 34頁。
- 常木 晃・西山伸一・アハマッド・サーベル・長谷川敦章・辰巳祐樹・宮内優子 2015 「肥沃な三日月地帯東部の新石器化・都市化—イラク・クルディスタン、カラート・サイド・アハマダン遺跡調査(2014年)」『平成26年度考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会報告集』26-33頁 日本西アジア考古学会。
- Tsuneki, A., K. Rasheed, S.A. Saber, S. Nishiyama, R. Anma, B.B. Ismail, A. Hasegawa, Y. Tatsumi, Y. Miyauchi, S. Jammo, M. Makino and Y. Kudo. 2015 Excavations at Qalat Said Ahmadan, Slemani, Iraq-Kurdistan: First interim report (2014 season). *Al-Rāfidān* 36: 1-50.

研究発表・講演

- Dougherty, S. and A. Tsuneki "Non-adult morbidity and mortality in Neolithic Syria". Annual Conference of Paleopathology Association (PPA) Meeting. April 8-9, 2014. University of Calgary, Alberta, Canada. (Poster presentation)
- Tsuneki, A. "Tappah Sang-i Chaxmaq and the Neolithization of North-eastern Iran". 9th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East. June 11, 2014. University of Basel, Basel, Switzerland.
- 中村俊夫・常木 晃 「イランの初期農耕牧畜集落Sang-e Chakhmaq 遺跡の14C年代」日本第四紀学会2014年大会(柏) 2014年9月5-9日 東京大学。(ポスター発表)
- Khazaeli, R., M. Mashkour, C. Daujeard, F. Biglari and A. Tsuneki "The taphonomical study on two faunal assemblages from Middle Paleolithic sites in Southern Zagros and central Iran: Qaleh Bozi (Esfahan) and Tang-e Shekan Cave (Fars)". 12th International Conference of Archaeozoology. September 22-27, 2014. San Rafael, Mendoza, Argentina.
- 常木 晃 「西アジアから現代への贈り物—平原のビールと山のワイン」西アジア考古学会公開シンポジウム 『古代西アジアの食文化—ワインとビールの物語—』2014年12月6日 早稲田大学。
- 常木 晃 「西アジア型農耕の始まり」第8回アジア考古学4学会合同講演会『アジアにおける農耕の起源と拡散』2015年1月10日 明治大学。
- 常木 晃 「開催趣旨」Rationale for the symposium, 「イドリブ県における日本隊の調査と遺跡の現状」Japanese archaeological investigations in Idlib district and the current status of these sites. シンポジウム『シリア内戦下の文化遺産: その危機と保護にむけて』 A Crisis of Syrian Cultural Heritage and the Efforts to Safeguard It. 2015年2月21日-22日 サンシャインシティ文化会館。
- 常木 晃 「西アジア考古学とAMS研究」第17回AMSシンポジウム特別講演会 2015年3月3日 筑波大学。
- Tsuneki, A. "Results of Tokyo Symposium", One-Day Meeting on Safeguarding of the Syrian Cultural Heritage Concerning Syria-Japan Cooperation. March 16, 2015. Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES), Beirut, Lebanon.

計画研究2 (A01): 古代の主食糧としてのコムギ栽培進化プロセスの解明

出版物

- Tanno, K., K. Takata and T. Kawahara 2015 Archeobotanical studies at and around Qalat Said Ahmadan. *Al-Rāfidān* 36: 59-63.
- 丹野研一 2015 「西アジアで生まれたお酒—ワインとビール」は、出土植物分析によって解明できるのか? 『古代西アジアの食文化—ワインとビールの物語—』日本西アジア考古学会編公開シンポジウム要旨集 69-73頁 日本西アジア考古学会。
- 岡崎 大・丹野研一・山根京子・河原太八・鎌田英一郎・荒木英樹・高橋 肇 2015 「四倍性コムギにおける粉状質化子実の電子顕微鏡観察」『日本作物学会中国支部研究集録』55号 23-24頁。
- 丹野研一・河原太八・山根京子・田中宏美・鎌田英一郎・荒木英樹・高橋 肇 2015 「早生のエンマーコムギ遺伝資源が国内向けデュラムコムギの作出を可能にする」『日本作物学会第239回講演会要旨集』28頁 日本作物学会。
- 丹野研一 2014 「農耕の始まりを出土植物から調査する」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 106-122頁。
- 丹野研一 2014 コラム: 「西アジア、田舎の絶品パン—いい加減さと混沌から時々々まれる最高にうまいパン」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 9頁。

計画研究3 (A01): 西アジア先史時代における工芸技術の研究

出版物

- 三宅 裕 2014 「西アジアの新石器時代—農耕・牧畜と社会の関係」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 90-103頁。
- 三宅 裕 2014 コラム: 「古環境データと西アジア考古学」『乳利用と乳製品』筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 87, 139頁。
- 三宅 裕 2014 「トルコ共和国ハッサンケイフ・ホユック遺跡の調査」『現代文明の基層としての古代西アジア文明Newsletter』4号 7-11頁。
- 三宅 裕(共著) 2015 「初期定住集落の姿を探る: トルコ、ハッサンケイフ・ホユック2014年度の調査」『平成26年度考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会報告集』20-25頁 日本西アジア考古学会。
- 前田 修 2014 「西アジア考古学の実践と現代社会—ヘゲモニー、ナショナリズム、アイデンティティ」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 260-271頁。
- 前田 修 2014 コラム: 「石器石材と自然・文化」『文化財の返還問題』筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 272頁。

研究発表・講演

- 三宅 裕 「初期定住集落の姿を探る—トルコ、ハッサンケイフ・ホユック第4次調査(2014)」第22回西アジア発掘調査報告会 2015年3月21日 池袋サンシャインシティ文化会館。
- 三宅 裕 「トルコの発掘調査最新事情—西アジア最古の神殿と新石器時代—」第40回栃木県オリエントセミナー 2014年5月24日 栃木県立博物館。
- 三宅 裕 「西アジアにおける初期銅冶金術」公開研究会「西アジアの工芸技術: パイロテクノロジーの系譜」2014年7月20日 筑波大学東京キャンパス。
- 三宅 裕 「西アジアの定住狩猟採集民—新石器時代初頭の社会—」研究会「人類の定住化と環境史—熱帯と温帯の比較—」2014年7月26日 国立民族博物館。
- Miyake, Y. "Excavations at Hasankeyf Höyük: An early Neolithic site in the Upper Tigris." International Symposium: Bridging Continents: Earliest Neolithic Communities across Anatolia. September 22, 2014. Nevali Hotel, Şanlıurfa, Turkey.
- 三宅 裕 「西アジアにおける乳利用の開始とその意義」公開シンポジウム「家畜化と乳利用 その地域的特質をふまえて」2015年5月17日 京都大学。

計画研究 4 (A01): 西アジア先史時代の石材供給に関する地質学

出版物

- 久田健一郎 2014 「西アジアの大地形と地質」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 46-58頁。
久田健一郎 2014 コラム:「西アジアの土壌」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 191頁。

研究発表・講演

- 久田健一郎・鎌田祥仁・荒井章司・M. Poshtkoohi 「南イラン、ザグロス山脈ネイリズオフィオライトのオプダクション」日本地質学会第121年学術大会 2014年9月13日 鹿児島大学。
Ueno, K., A. Miyahigashi, Y. Kamata, K. Hisada, H. Hara, K. Uno, T. Charoentitirat, P. Charusiri, S. Kongthiphavong, K. Vilaykham and K. Khamphavong "Permian and Triassic carbonates in the OudomXaiLuangNamtha area, Northern Laos: Stratigraphical and paleontological constraints for connecting Northern Laos with Northern Thailand". The Third International Symposium of the International Geological Correlation Programme 589; Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes. October 21, 2014. Amirkabir Technical University, Tehran, Iran.
Hisada, K., Y. Kamata, S. Arai and M. Poshtkoohi "Obduction of Neyriz ophiolite". The Third International Symposium of the International Geological Correlation Programme 589; Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes. October 21, 2014. Amirkabir Technical University, Tehran, Iran. (Poster presentation)
Miyake, Y. and K. Hisada "Provenance shift based on occurrence of detrital chromian spinels in the Lower Cretaceous of Chichibu Belt, Kyushu, SW Japan". The Third International Symposium of the International Geological Correlation Programme 589; Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes. October 21, 2014. Amirkabir Technical University, Tehran, Iran. (Poster presentation)
Kamata, Y., K. Ueno, A. Miyahigashi, K. Hisada, H. Hara, K. Uno, T. Charoentitirat, P. Charusiri, S. Kongthiphavong, K. Vilaykham and K. Khamphavong "Middle Triassic acidic tuff in the OudomXai area, Northern Laos and its geological correlation with Northern Thailand". The Third International Symposium of the International Geological Correlation Programme 589; Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes. October 21, 2014. Amirkabir Technical University, Tehran, Iran.
Tominaga, K., K. Hisada, K. Ueno, H. Taniguchi, K. Yasukawa, S. Machida and Y. Kato "Depositional facies analysis and petrology of accreted oceanic seamount rocks: implications for accretion tectonics of seamount". Cust-Mantle Evolution in Active Arcs 2015. February 15, 2015. Sequoia Hotel, Metro Manila, Philippines.

計画研究 5 (A01): 西アジア都市文明の資源基盤と環境

出版物

- 本郷一美 2015 「動物考古学からみた家畜化」家畜資源研究会報 14: 8-16頁。
本郷一美 2014 「西アジアの動物利用」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 124-138頁。
本郷一美 2014 コラム:「考古学から見た遊牧」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 214頁。

研究発表・講演

- Hongo, H. "Resource exploitation in the early Neolithic and the transition to food production: zooarchaeological evidence from South-west Asia". 総研大国際シンポジウム「現生人類の拡散による遺伝子と文化に関する総合的研究」2014年2月3-4日 総合研究大学院大学。
本郷一美 「考古遺跡における消費活動の変化」学融合推進センタープロジェクトセミナー「料理の環境文化史」2014年3月23日 国立民族学博物館。

- 本郷一美 「家畜の優等生、ブタ:家畜化と人の多様な関わり」生き物文化誌学会沖縄例会 2015年2月7日 沖縄こどもの国。
本郷一美 「動物考古学から見た家畜化と乳利用開始」シンポジウム「家畜化と乳利用 その地域的特質をふまえて一搾乳の開始を巡る谷仮説を皮きりとして」2015年5月16-17日 京都大学稲森記念財団記念館。

計画研究 6 (A02): 古代西アジアの文字文化と社会 —前2千年紀におけるユーフラテス中流域とハブル流域—

出版物

- Yamada, S. 2014 Review article: Olivier Rouault, Terqa Final Report 2: Les textes des saisons 5 à 9, Bibliotheca Mesopotamica, Volume 29, Malibu: Undena Publications, 2011, *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 104(1): 107-112.
山田重郎 2014 「古代西アジアの歴史と文書史料」筑波大学西アジア文明センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 194-213頁。
山田重郎 2014 コラム:「生命の木」筑波大学西アジア文明センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 123頁。
山田重郎 2014 「楔形文字文書にみるメソポタミアのビールとワイン」『古代西アジアの食文化～ワインとビールの物語～』日本西アジア考古学会編 公開シンポジウム要旨集 12-16頁 日本西アジア考古学会。
中田一郎 2014 「シッパル出土の古バビロニア時代小作契約文書に見るナディートゥムの経済活動」、唐橋文編『(独法)日本学術振興会国際交流事業補助金による平成23—26年度研究成果報告書(研究課題:古代メソポタミアの経済における女性の役割) 102-120頁。
中田一郎 2014 「粘土板に刻まれた文字」『遙かなるメソポタミア—時空を超えたヒトの営み—』(平成26年度 大阪府立弥生文化博物館 夏期特別展ハンドブック) 18頁。
中田一郎 2014 「ハンムラビ法典」『遙かなるメソポタミア—時空を超えたヒトの営み—』(平成26年度 大阪府立弥生文化博物館 夏期特別展ハンドブック) 28頁。
Tuji, A., A. Marsh, M. Altaweel, C. Watanabe and J. Taylor 2014 "Diatom analysis of cuneiform tablets housed in the British Museum", *Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany* 40 (3): 101-106.
渡辺千香子 2014 「古代メソポタミアにおけるワインとビールの文化」『古代西アジアの食文化～ワインとビールの物語～』日本西アジア考古学会編 公開シンポジウム要旨集 52-55頁 日本西アジア考古学会。
渡辺千香子 2015 「メソポタミアの王権と日傘に関する考察」『大阪学院大学人文自然論叢』69-70号 13-34頁。
Watanabe C. (in press) Association of the dog with healing power in Mesopotamia, *At the Dawn of History: Ancient Near Eastern Studies in Honour of J. N. Postgate*, Eisenbraun.
Watanabe C. (in press) Philological and scientific analyses of cuneiform tablets housed in Sulaymaniyah (Slemani) Museum, *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*, (eds.) K Kopanias and J. MacGinnis, Oxford: Archaeopress.
- ##### 研究発表・講演
- 山田重郎 「Ulluba行政州とその周辺—Tiglath-pileser 3世のウラルトウ前線地帯における行政州分割」第57回シュメール研究会 2014年6月20日 立教大学。
Yamada, S. "Chronographic Patterns and the Sense of Chronology in the Neo-Assyrian Royal Inscriptions". International Meeting: "Writing Neo-Assyrian History: Sources, problems and approaches". September 23, 2014. University of Helsinki, Helsinki, Finland.
山田重郎 「楔形文字文書に見るメソポタミアのビールとワイン」公開シンポジウム「古代西アジアの食文化:ワインとビールの物語」2014年12月6日 早稲田大学。
Yamada, S. "Ulluba and Its Surroundings: Tiglath-pileser III's province making facing the Urartian border reconsidered from royal inscriptions and letters". Conference: "Interaction, Interplay and

Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources". December 12, 2014. Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Japan.

Yamada, S. "Neo-Assyrian Eponym Lists and Eponym Chronicles: Stylistic variants and their historical-ideological background". Melammu Symposium 9: Conceptualizing Past, Present and Future. May 19, 2015. University of Helsinki, Helsinki, Finland.

山田重郎 「新アッシリア王碑文の編年記録—スタイルの変化とその背景について」 第58回シュメール研究会 2015年6月28日 京都大学.

Nakata, I. "Economic Activities of *naditum*-women of Shamash Reflected in the Field Sale Contracts Published in *MHET* II, 1-6". November 6, 2014. University of Paris X (Nanterre), Paris, France.

中田一郎 「ハンムラビ法典作成の目的とその現代的意義」メソポタミア展開記念講演会 2014年8月9日 大阪府立弥生文化博物館.

中田一郎 「ハンムラビ法典の現代的意義」特別講演会 2015年5月16日 岡山市立オリエンタル美術館.

中田一郎 「ハンムラビ法典—意外と知られていない話—」日本オリエント学会第311回公開講演会 2015年5月23日 東京天理ビル.

Novotny, J. and C. Watanabe "Unraveling the mystery of an unrecorded event: identifying the four foreigners paying homage to Ashurbanipal in BM ME 124945-6". Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources. December 19, 2014. Tsukuba, Japan.

渡辺千香子 「古代メソポタミアにおけるワインとビールの文化」日本西アジア考古学会公開シンポジウム「古代西アジアの食文化:ワインとビールの物語」2015年1月31日 中部大学.

安間了・渡辺千香子・申基澈・昆慶明・辻彰洋・中野孝教・横尾頼子 「メソポタミア粘土板胎土の組成と原産地特定の試み」日本地球惑星科学連合2015年大会 H-TT31-P17 環境トレーサビリティー手法の新展開 2015年5月27日 幕張メッセ。(ポスター発表)

Novotny, J. and C. Watanabe "Identifying the four foreigners paying homage to Assurbanipal in BM ME 124945-6 through textual and pictorial sources". 61st Rencontre Assyriologique Internationale. June 22, 2015. Geneva, Switzerland.

計画研究7 (A02): 周辺アッカド語文書に見る古代西アジアの言語・歴史・宗教に関する総合的研究

出版物

池田潤・永井正勝 2014 「古代西アジアの言語と文字」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 176-190頁.

池田潤 2014 コラム:「聖書に登場する植物」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 44頁.

Yamada, M. 2014 The Royal and Urban Authorities in Emar: A Diachronic Analysis of Their Relations, *Al-Rāfidān* 35: 73-108.

山田雅道 2014 「Ekalte II 25について」『オリエンタル』57巻1号 73-75頁.

研究発表・講演

Yamada, M. "The Women Designated 'Man and Woman' in Emar and Ekalte," 日仏共同研究プログラムREFEMA (= Le Rôle Économique des Femmes en Mésopotamie Ancienne) 4th Workshop: "Femmes et patrimoine: constitution, conservation et transmission des biens familiaux" May 26, 2014. 中央大学.

山田雅道 「両性化された女性:エマル・エカルテ文書における『父と母』について」第57回シュメール研究会 2014年6月21日 立教大学.

山田雅道 「特殊な『世話』契約としてのRE 6」日本オリエント学会第56回大会 2014年10月26日 上智大学.

Yamada, M. "On the kubuddā'u in the Emar Texts," 日仏共同研究プログラムREFEMA Final Conference: "Travail et société : la part du féminin" November 6, 2014. Université Paris Ouest Nanterre La Défense, bâtiment B, Salle des conférences.

計画研究8 (A02): バビロニア・アッシリアの「政治」と「宗教」—領土統治における神学構築と祭儀政策

出版物

Shibata, D. 2015 Dynastic Marriages in Assyria during the Late Second Millennium B.C., in: B. Düring (ed.), *Understanding Hegemonic Practices of the Early Assyrian Empire: Essays Dedicated to Frans Wiggermann*, PIHANS 125, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten: Leiden, pp. 235-242.

Shibata, D. (in press; to be published in 2015) Hemerology, Extispicy and Ili-padā's Illness, *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie*105(2).

Shibata, D. (in press; to be published in 2016) Middle Assyrian Legal Documents of Adad-bel-gabbe II, King of the Land of Mari, in: D. Prechel and H. Neumann (eds), *Festschrift für Helmut Freydanck*, Alter Orient und Altes Testament NN, Ugarit Verlag: Münster.

柴田大輔 2014 「楔形文字文書と古代西アジアの社会・文化」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 216-236頁.

柴田大輔 2014 コラム:「シュメール神話における神々の大治水工事」「王への手紙が伝えるアッシリアの地震」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 30, 69頁.

柴田大輔 (印刷中) 「アッシリアにおける国家と神殿—理念と制度—」『宗教研究』89巻2輯 日本宗教学会.

永井正勝 2014 コラム:「西アジアにおける1日の始まり」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 174頁.

研究発表・講演

Shibata, D. "The Akitu-festival of Ishtar at Nineveh: Royal Inscriptions and Emesal-prayers". Conference: "Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources", December 13, 2014. Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Japan.

柴田大輔 「Middle Assyrian Legal Documents of Adad-bēl-gabbe II, King of the Land of Māri」第58回シュメール研究会 2015年6月28日 京都大学ユーラシア文化研究センター.

計画研究9 (A03): 多元素同位体分析による古代西アジアにおける古環境復元

出版物

丸岡照幸 2014 「同位体質量分析計を用いた環境変動解析」*Journal of the Mass Spectrometry Society of Japan* 62 (5): 49-60.

Kato, S., K. Ikehata, T. Shibuya, T. Urabe, M. Ohkuma and A. Yamagishi 2014 Potential for biogeochemical cycling of sulfur, iron and carbon within massive sulfide deposits below the seafloor. *Environmental Microbiology* 17(5): 1817-1835.

丸岡照幸 2014 「化学の目で読み解く古環境」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 72-86頁.

Kagoshima, T., Y. Sano, N. Takahata, T. Maruoka, T.P. Fischer and K. Hattori 2015 Sulphur geodynamic cycle. *Scientific Reports* 5: 8330.

Shibata, T., T. Maruoka and T. Echigo 2015 Inferring origin of mercury inclusions in quartz by multifractal analysis. *Nonlinear Processes in Geophysics* 22(1):47-52.

Ishibashi, J. K. Shimada, F. Sato, A. Uchida, S. Toyoda, A. Takamasa, S. Nakai, H. Hyodo, K. Sato, H. Kumagai and K. Ikehata 2015 Dating of Hydrothermal Mineralization in Active Hydrothermal Fields in the Southern Mariana Trough. *Subseafloor Biosphere Linked to Hydrothermal Systems TAIGA Concept*. Springer, pp.289-300.

Ikehata, K., R. Suzuki, K. Shimada, J. Ishibashi and U. Urabe 2015 Mineralogical and Geochemical Characteristics of Hydrothermal Minerals Collected from Hydrothermal vent fields in the Southern Mariana spreading center. *Subseafloor Biosphere Linked to Hydrothermal Systems TAIGA Concept*. Springer, pp.275-287.

研究発表・講演

- 丸岡照幸・上松佐知子・指田勝男 「生物大量絶滅に関わる環境変動の解析: 軽元素安定同位体比分析によるアプローチ」質量分析総合討論会 2014年5月16日 ホテル阪急エキスポパーク。
- 丸岡照幸・川武當崇正・大野 剛・村松康行・松本拓也・松崎浩之・P. Aggarwal 「つくば市の降水に含まれる福島第一原発由来のトリチウム、ヨウ素-129の変遷」日本地球化学会年会 2014年9月18日 富山大学。
- 丸岡照幸 「連続フロー型同位体質量分析装置によるリン酸塩酸素同位体比分析」日本質量分析学会同位体比部会研究会 2014年11月27日 茨城県つくば市。
- 丸岡照幸・磯崎行雄 「硫黄・炭素同位体組成で推定するペルム紀中 - 後期境界における海洋環境変遷」日本惑星科学連合2015年大会 2015年5月24日 幕張メッセ。

計画研究10 (A03): 堆積物に記録される西アジアにおける第四紀環境変動の解読

2014年度から高橋学・昆慶明(産業技術総合研究所)、申基澈(総合地球環境学研究所)氏に研究分担者として参加していただきました。

出版物

- 安間 了・山本由弦・下司信夫・七山 太・中川正二郎 2014 「世界遺産の島・屋久島の地質と成り立ち」『地質学雑誌』第120巻(補遺) 101-125頁。
- Tsuneki, A., K. Rasheed, S.A. Saber, S. Nishiyama, R. Anma, B.B. Ismail, A. Hasegawa, Y. Tatsumi, Y. Miyauchi, S. Jammo, M. Makino and Y. Kudo 2015 Excavations at Qalat Said Ahmadan, Slemani, Iraq-Kurdistan: First Interim Report (2014 Season). *Al-Rāfidān* 36: 1-50.
- Anma, R. 2015 Appendix 1: Stones used in the Qalat Said Ahmadan and their sources. *Al-Rāfidān*, 36: 51-53.
- 安間 了 2014 「西アジアの自然環境」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 12-30頁。
- 安間 了 2014 コラム: 「黒海の海水面変動と洪水伝説」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 237頁。
- Horiuchi, Y., T. Ohno, M. Hoshino, K. Shin, H. Murakami, M. Tsunematsu and Y. Watanabe 2014 Geochemical prospecting for rare earth elements using termite mound materials. *Mineralium Deposita* 49(8): 1013-1023.
- Nagatsuka, N., N. Takeuchi, T. Nakano, K. Shin and E. Kokado 2014 Geographical variations in Sr and Nd isotopic ratios of cryoconite on Asian glaciers. *Environmental Research Letters* 9(4): 045007.
- Kim, J., M. Son, B. Hwang, K. Shin, H. Cho and Y. K. Sohn 2014 Double injection events of mafic magma into supersolidus Yucheon granites to produce two types of mafic enclaves in the Cretaceous Gyeongsang Basin, SE Korea. *Mineralogy and Petrology* 108(2): 207-229.

研究発表・講演

- 安間 了・渡辺千香子・申基澈・昆慶明・辻 彰洋・中野孝教・横尾頼子 「メソポタミア粘土板胎土の組成と原産地特定の試み」地球惑星科学関連学会合同大会 HTT-31. 2015年5月27日 幕張メッセ。
- 安間 了・申基澈・横尾頼子 「堆積物に探る最終間氷期以降のアラビア半島・西アジアの環境変動: プロジェクト紹介」第4回同位体環境学シンポジウム 2014年12月22日 総合地球環境学研究所。
- Anma, R. "Possible use of zircon geochronology as a tool to estimate distance between obducted margin and place of origin of an ophiolite". IGCP 589. October 22, 2014. Tehran, Iran.
- 安間 了 「西アジアの地質・自然環境と人類史」日本地質学会第121年学術大会 2014年9月14日 鹿児島大学。
- 佐藤 稔・高橋 学・竹村 貴人・安間 了 「微視的内部構造からみた砂岩試料における剪断面近傍の透水性評価」地球惑星科学関連学会合同大会 2014年5月2日 パシフィコ横浜。
- 諸隈曉俊・中島 礼・安間 了・藤倉克則・間嶋隆一 「殻形態から識別されたノチールシロウリガイの2形態型」地球惑星科学関連学

- 会合同大会B-PT-24-08. 2014年4月29日 パシフィコ横浜。
- 吉田佳明・道林克禎・安間 了 「南アメリカタイタオオフィオリイト最上部マントルかんらん岩の構造岩石学的特徴」地球惑星科学関連学会合同大会2014年4月28日 パシフィコ横浜。
- 安間 了 「ジルコノロジーの考古学への応用の可能性をさぐる」フイッショントラック研究会 2014年2月18日 大阪。
- 申基澈・中野孝教・多田洋平・安部 豊・森 誠一・池田浩一 「岩手県大槌町の河川水質マップ」第4回同位体環境学シンポジウム 2014年12月22日 京都。
- SHIN Kicheol・中野孝教・森 誠一・池田浩一 「岩手県大槌町の河川水の水質成分と安定同位体比の分布」日本地球惑星科学連合2015年大会 2015年5月27日 幕張メッセ。

計画研究11 (A03): 西アジアの地震活動

出版物

- Yagi, Y. and R. Okuwaki 2015 Integrated seismic source model of the 2015 Gorkha, Nepal, earthquake. *Geophysical Research Letters* 42: 6229-6235.
- Yagi, Y., R. Okuwaki, B. Enescu and Y. Fukahata 2015 Unusual low-angle normal fault earthquakes after the 2011 Tohoku-oki megathrust earthquake. *Earth Planets Space* 67: 100.
- 八木勇治 2014 「地震の基礎知識と西アジアの地震活動」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 60-68頁。
- 八木勇治 2014 コラム: 「地震と文化財」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 258頁。
- Yagi, Y., R. Okuwaki, B. Enescu, S. Hirano, Y. Yamagami, S. Endo and T. Komoro 2014 Rupture process of the 2014 Iquique Chile earthquake in relation with the foreshock activity. *Geophysical Research Letters* 41: 4201-4206.
- Okuwaki, R., Y. Yagi and S. Hirano 2014 Relationship between High-frequency Radiation and Asperity Ruptures, Revealed by Hybrid Back-projection with a Non-planar Fault Model. *Scientific Reports* 4: 7120.
- Shimojo, K., B. Enescu, Y. Yagi, and T. Takeda 2014 Fluid-driven Seismicity Activation in Northern Nagano Region After the 2011 M9.0 Tohoku-oki Earthquake, *Geophysical Research Letters* 41: 7524-7531.
- 木下祐介・八反地剛・八木勇治・江崎隼輝・奥村大輔 2014 「東北地方太平洋沖地震とそれ以降の降雨 による斜面崩壊: 茨城県北部の花崗岩山地における事例」『地形』第35巻1号 25-39頁。
- Fukahata, Y., Y. Yagi and L. Rivera 2014 Theoretical relationship between back-projection imaging and classical linear inverse solutions. *Geophysical Journal International* 196: 552-559.
- Funning, G.J., Y. Fukahata, Y. Yagi, and B. Parsons 2014 A method for the joint inversion of geodetic and seismic waveform data using ABIC: application to the 1997 Manyi, Tibet, earthquake. *Geophysical Journal International* 196: 1564-1579.

計画研究12 (A03): 西アジア古代遺跡の石器・土器の組成・微細組織データベース

出版物

- Kurosawa, M. 2014 Mineralogical study of pottery from Tappeh Sange-e Chakhmaq. In Tsunaki, A. Ed., *The First Village in North-east Iran and Turan: Tappeh Sange-e Chakhmaq and Beyond*. Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba, Tsukuba, pp. 19-22.
- 黒澤正紀 2014 「化学の目で読み解く土器・石器」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 140-154頁。
- 黒澤正紀 2014 コラム: 「西アジアの威信財」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 104頁。
- Kurosawa, M., K. Sasa, and S. Ishii 2015 Micro-PIXE analyses of single fluid inclusions in quartz from Tanzawa granite, Japan. *An-*

Annual Report of Tandem Accelerator Center, University of Tsukuba
84: 37-39.

計画研究13 (A04): 西アジア文化遺産の材質と保存状態に関する自然科学的研究

出版物

Mazurek, J., M. Svoboda, J. Maish, K. Kawahara, S. Fukakusa, T. Nakazawa and Y. Taniguchi 2014 Characterization of binding media in Egyptian Romano portraits using Enzyme-Linked Immunosorbant Assay and Mass Spectrometry. *e-Preservation Science* 11: 76-83.

Taniguchi, Y. (ed.) 2015 *Scientific research for conservation of the rock hewn Church, Üzümlü, Turkey*: vol. 1 Annual report on the activities in 2014. University of Tsukuba.

谷口陽子 2014 「西アジアの文化遺産をまもる」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 240-257頁.

谷口陽子 2014 コラム: 「古代西アジアの色彩—ひとの手で生み出した色」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 155頁.

吉岡瑞穂・伊庭千恵美・鈴木修一 2015 「カッパドキア岩窟教会外壁での表面処理による凍結破砕防止に関する研究—表面処理剤が壁体内部の表面処理剤が壁体内部の含水率分布に与える影響の検討—」日本建築学会近畿支部研究報告集 環境系 第55号 289-292頁.

研究発表・講演

島津美子・谷口陽子・山内和也 「アジャンター仏教寺院遺跡第2窟にみられる赤色の有機質色材に関する調査」文化財保存修復学会第36回大会 2014年6月7日 明治大学.

深草俊輔・河原一樹・J. Mazurek・M. Svoboda・J. Maish・谷口陽子・中沢 隆 「ローマ期エジプトの三連祭壇画に使われた膠着剤原料の E L I S A 法および質量分析法による同定」文化財保存修復学会第36回大会 2014年6月7日 明治大学.

Taniguchi, Y. "Scientific research for conservation of the rock hewn Church, Üzümlü". 37th International Symposium on Excavations, Surveys and Archaeometry, May 14, 2015. Erzurum, Turkey.

吉岡瑞穂・伊庭千恵美・鈴木修一 「カッパドキア岩窟教会外壁で

の表面処理による凍結破砕防止に関する研究—表面処理剤が壁体内部の表面処理剤が壁体内部の含水率分布に与える影響の検討—」日本建築学会近畿支部研究発表会 2014年6月27日 大阪工業技術専門学校.

谷口陽子・島津美子・釘屋奈都子・柴田みな・樋口 諒・J. Porter・鈴木 環・M. Gulyaz 「カッパドキア・ウズムル岩窟教会壁画の保存修復: 彩色材料と保存状態」文化財保存修復学会第37回大会 2015年6月28日 京都工芸繊維大学.

深草俊輔・河原一樹・高嶋美穂・谷口陽子・宮路淳子・松尾良樹・中沢 隆 「高分解能 MALDI 質量分析計を用いた膠の原料動物種の同定」文化財保存修復学会第37回大会 2015年6月28日 京都工芸繊維大学.

佐野勝彦・谷口陽子・渡邊晋生・小泉圭吾・伊庭千恵美 「含浸酸化系保護剤を用いたカッパドキア岩石保護の検討」文化財保存修復学会第37回大会 2015年6月28日 京都工芸繊維大学.

高嶋美穂 「ELISA (エライザ) 法による美術作品中の蛋白質および植物ガムの同定」文化財保存修復学会第37回大会 2015年6月27日 京都工芸繊維大学.

アウトリーチ

常木 晃

2015.2.26放送: NHK 暮らし解説「危機のシリア遺跡を救うために」

2015.5.22放送: フジテレビ みんなのニュース「世界遺産に迫る危機」

2015.6.2放送: NHKラジオ第1放送 先読み! 夕方ニュース「特集 ISが攻勢強めるシリア危機の遺跡を守るには?」

丸岡照幸

2014.03.21 「重い水素と軽い水素—原子の重さを測って環境変動をとらえる」(広尾学園中学校・高等学校)

2014.08.25 「いん石クレーターを作ってみよう」(大阪市立東高等学校)

2014.12.21 「隕石衝突と地球環境の関わり」(千葉県立佐倉高等学校)

2015.03.22 「地球に刻まれる縞々(しましま)のひみつ」(広尾学園中学校・高等学校)

2015.06.29 「隕石クレーターを作ろう—隕石衝突と地球環境のかかわり」(創価高等学校)

書籍出版

『西アジア文明学への招待』 筑波大学西アジア文明研究センター編 2014 悠書館

戦乱続く西アジアは、人類にとって最も重要な文明の揺籃地でもあります。そこでは農耕や都市が世界に先駆けて発達し、文字や体系的宗教なども生まれています。本書はこの西アジアで現地調査している筑波大学等の研究者たちが、地質学や考古学、楔形文字学などの視点から西アジア文明をやさしく読み解いています。また本新学術領域研究の成果を盛り込んでおり、筑波大学総合科目「西アジア文明学への招待」の教科書にも採用されています。



序章 西アジア文明学の提唱

第I部 文明の舞台西アジア

- 第I章 西アジアの自然環境
- 第II章 西アジアの植生
- 第III章 西アジアの大地形と地質
- 第IV章 地震の基礎知識と西アジアの地震活動
- 第V章 化学の目で読み解く古環境

第II部 文明の礎—先史時代の西アジア

- 第I章 西アジアの石器時代—農耕・牧畜と社会の関係
- 第II章 農耕の始まりを出土植物から調査する
- 第III章 西アジアの動物利用
- 第IV章 化学の目で読み解く土器・石器

第III部 西アジア文明の形成

- 第I章 都市文明へ
- 第II章 古代西アジアの言語と文字
- 第III章 古代西アジアの歴史と文書史料
- 第IV章 楔形文字文書と古代西アジアの社会・文化

第IV部 西アジア文明と現代

- 第I章 西アジアの文化遺産をまもる
- 第II章 西アジア考古学の実践と現代社会—ヘゲモニー、ナショナリズム、アイデンティティ

シンポジウム・研究会開催予定

平成27年10月25日(日)

古代メソポタミア・エジプトにおける「政治」と「宗教」

会場:筑波大学東京キャンパス文京校舎121講義室

平成27年11月6日(金)

タンパク質研究と文化遺産・考古学

会場:筑波大学総合研究A棟110

平成27年11月14日(土)

シンポジウム:古代メソポタミアにおけるジオアーケオロジー研究の進展 - 粘土板・古地理・微化石 -

会場:埼玉大学東京ステーション・カレッジ

平成27年11月21日(土)

初期キリスト教における「政治」と「宗教」

会場:早稲田大学高等研究所

活動履歴 (平成27年4月～8月)

平成27年3月26日 連続講演会「先史時代のカッパドキア:アシュックル・ホユックと中央アナトリアの先土器新石器時代」
於:筑波大学総合研究A棟 107

発表者: Mihriban Özbasaran (Istanbul University, Turkey) “Transition to an Innovative Way of Life: Aşıklı Höyük (Central Anatolia - Turkey)”
Nurcan Kayacan (Istanbul University, Turkey) “Change and Continuity in the Lithics of Aşıklı Höyük (Central Anatolia - Turkey)”

平成27年4月20日 第27回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年4月28日 「カッパドキア・ウズムル岩窟教会と壁画の保存に関する研究会」
於:京都大学桂キャンパス CクラスターC 2棟 413ゼミ室

発表者: 吉岡瑞穂(京都大学大学院工学研究科)「カッパドキア岩窟教会外壁での表面処理が壁体内部の含水率分布に与える影響の検討」
渡辺晋生(三重大学大学院生物資源学研究科)「カッパドキアの岩窟教会壁面中の水分移動解析」
谷口陽子(筑波大学人文社会系)「ウズムル教会壁画の技法材料分析結果および保存上の課題」

平成27年5月18日 第28回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年5月29日 「古代マヤ文明の広場:メキシコ合衆国エル・パルマール遺跡から」
於:筑波大学総合研究棟A110

発表者:塚本憲一郎(青山学院大学)

平成27年6月22日 第29回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年7月13日 第30回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

2012-2016年度 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究(研究領域提案型)」
「現代文明の基層としての古代西アジア文明 —文明の衝突論を克服するために—」

ニュースレター Vol. 6

平成 27年 9月 30日 発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究(研究領域提案型)」
「現代文明の基層としての古代西アジア文明 —文明の衝突論を克服するために—」
領域代表 常木 晃

編集： 総括班編集委員

印刷： 前田印刷株式会社

〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻事務室 付 西アジア文明研究センター

Eメール： rcwasia@hass.tsukuba.ac.jp

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken>



Newsletter Vol.6

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken>